岩倉遺跡

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第13集

倉敷埋蔵文化財センター

2009.3

序

吉備高原に源を発する足守川は、倉敷市と岡山市の境に接して南流しており、流域の肥沃な平野には弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が点在しています。

その中のひとつである岩倉遺跡は、かつて総社平野を横切って流れていたとされる高梁川の分流が瀬戸内海に注ぐ、河口付近に位置する遺跡であったと考えられています。岩倉遺跡の北端にあたる岩倉神社のある小丘から南側一帯にかけては、河川の沖積作用により自然堤防が形成されており、そこには早い時期からひとびとが暮らしていた痕跡が残されています。

岩倉遺跡では、昭和の初期に地元の研究者により木葉文の刻まれた土器片が採集されたことから、市内でも数少ない弥生時代前期からはじまる遺跡であることが知られています。しかしながら、岩倉遺跡周辺ではこれまでに新幹線や都市計画道路などの建設に伴い発掘調査が行われたものの、その実態についてはまだまだ未解明の部分が多く残されています。

今回の調査は、ガソリンスタンド建設に伴い実施されたもので、部分的な発掘調査ではありましたが、竪穴住居跡や掘立柱建物、井戸、溝などが検出され、弥生時代後期を中心とした岩倉遺跡の南端部周辺の状況を明らかにすることができました。

本書にまとめました内容が、今後の埋蔵文化財の保護保存のための資料として活用されますとともに、学術研究の基礎資料として、また郷土の歴史を研究するための資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理にいたりますまで、ご指導ご協力をいただきました関係各位に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長　吉田雄平

例　言

1．本書は、ガソリンスタンド建設に伴い発掘調査を実施した倉敷市日畑地内に所在する岩倉遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課学芸員福本 明・鍵谷守秀・小野雅明・谷岡孝久（職名等はいずれも調査当時）が担当し、平成2年11月13日から平成3年2月15日にかけて実施した。

3．本書の執筆は、第1章および第3章の石器類を藤原好二、その他は福本が担当し、全体の編集は藤原が行った。

4．発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は福本が行った。

5．出土遺物の整理及び報告書作成は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては倉敷埋蔵文化財センター臨時職員岸本佳与、同派遣職員梅木明美、原 典子、赤澤美佐子、野口紋可、藤原純子の協力を得た。

6．本書の挿図に使用した高度値は海抜高であり、方位はいずれも磁北である。

7．本書第2図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。

8．発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

序

第１章 遺跡の位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 1

第２章 調査に至る経緯と経過 …… 4

第１節　調査に至る経緯 …… 4

第２節　調査の経過 …… 5

第３章 発掘調査の概要 …… 7

第１節　調査区の概要 …… 7

第２節　遺構と遺物 …… 9

１．弥生時代の遺構と遺物 …… 9

（１）竪穴住居 …… 9

（２）掘立柱建物 …… 10

（３）井戸 …… 11

（４）土壙 …… 11

（５）溝 …… 20

２．古代・中世の遺構と遺物 …… 33

（１）土壙 …… 33

（２）溝 …… 34

第４章 まとめ …… 40

挿図目次

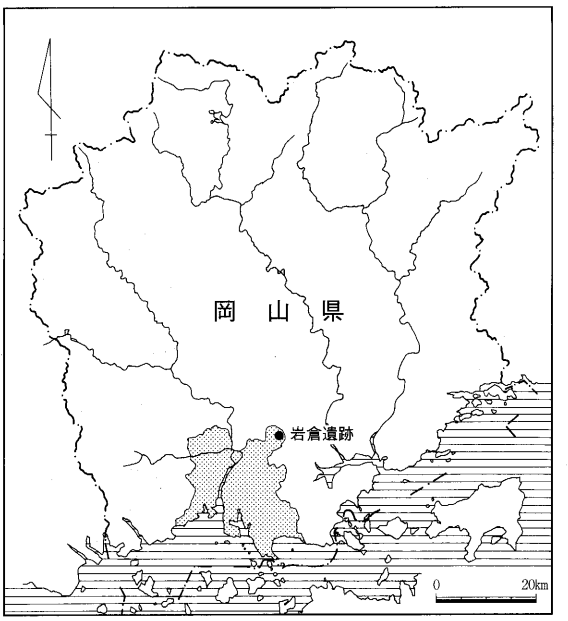
第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡（Ｓ=1/25,000）…… 2
第３図　調査地位置図（Ｓ=1/10,000）…… 4
第４図　確認調査トレンチ配置図（Ｓ=1/800）…… 4
第５図　調査区全体図（Ｓ=1/800）…… 7
第６図　調査区北辺部北壁断面図（Ｓ=1/80）…… 8
第７図　弥生時代遺構配置図（Ｓ=1/250）… 9
第８図　竪穴住居実測図（Ｓ=1/80）…… 10
第９図　掘立柱建物実測図（Ｓ=1/80）…… 10
第10図　井戸出土遺物（Ｓ=1/4）…… 10
第11図　井戸実測図（Ｓ=1/30）…… 11
第12図　土壙実測図１（Ｓ=1/30）…… 12
第13図　土壙実測図２（Ｓ=1/30）…… 13
第14図　土壙実測図３（Ｓ=1/30）…… 14
第15図　土壙実測図４（Ｓ=1/30）…… 15
第16図　土壙実測図５（Ｓ=1/30）…… 16
第17図　土壙６出土遺物（Ｓ=1/4）…… 17
第18図　土壙７出土遺物（Ｓ=1/4）…… 17
第19図　土壙11出土遺物（Ｓ=1/4）…… 18
第20図　土壙16出土遺物（Ｓ=1/4・1/2）‥ 19
第21図　溝１実測図（Ｓ=1/80）…… 21
第22図　溝１出土遺物１（Ｓ=1/4）…… 22
第23図　溝１出土遺物２（Ｓ=1/4）…… 23
第24図　溝１出土遺物３（Ｓ=1/4）…… 24
第25図　溝１出土遺物４（Ｓ=1/4）…… 25
第26図　溝１出土遺物５（Ｓ=1/4）…… 26
第27図　溝１出土遺物６（Ｓ=1/4）…… 27
第28図　溝１出土遺物７（Ｓ=1/4・1/2）… 28
第29図　溝１出土遺物８（Ｓ=2/3・1/2）… 30
第30図　溝１・溝２断面図（Ｓ=1/40）…… 31
第31図　溝３出土遺物（Ｓ=1/4）…… 31
第32図　溝４出土遺物（Ｓ=1/4）…… 32
第33図　溝５・溝９断面図（Ｓ=1/40）…… 33
第34図　古代・中世遺構配置図（Ｓ=1/250）…… 34
第35図　溝６実測図（Ｓ=1/100）…… 35
第36図　溝６出土遺物（Ｓ=1/4）…… 35
第37図　溝７実測図（Ｓ=1/100）…… 36
第38図　溝７出土遺物（Ｓ=1/4・1/2）…… 37
第39図　溝８出土遺物（Ｓ=1/4）…… 38
第40図　溝９出土遺物（Ｓ=1/4）…… 39
第41図　西方落ち込み出土遺物（Ｓ=1/4）‥ 39

図版目次

図版１　１．調査区遠景（東方からの航空写真）
　　２．調査区全景（航空写真）
　　３．住居跡（南東から）
図版２　１．掘立柱建物（北から）
　　２．井戸（南から）
　　３．北辺部土壙群（北から）
図版３　１．土壙６（東から）
　　２．溝１全景（北から）
　　３．溝１土器出土状況（北西から）
図版４　１．溝１完掘状況（北から）
　　２．北辺部溝１（南から）
　　３．溝５・溝９（西から）
図版５　１．北辺部北壁土層断面（東から）
　　２．作業風景
　　３．現地説明会風景
図版６　出土遺物（１）
図版７　出土遺物（２）
図版８　出土遺物（３）

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境



第１図　遺跡の位置

岩倉遺跡のある倉敷市庄地区は、北西に標高211mの日差山がそびえる。その尾根は東に向かって下っていき、王墓山の低丘陵をへて、足守川へといたる。地区の大部分をしめる沖積平野を形成した足守川はほぼ岡山市との境界に沿って南下している。

足守川の西岸、王墓山丘陵南側の沖積平野の真ん中にぽっかりと残る岩倉神社の社叢に近づくと巨岩が累々と重なる奇観を呈している。円形の社地は径80mほどで、社叢はあたかも巨岩の間から枝をのばしているかのごとくである。この社叢から南に続く微高地上に形成されたのが岩倉遺跡である。吉備高原から流れ出た足守川は、今でこそ一筋となって南に流れるが、治水の黎明期にある弥生時代には、幾筋にも分流し、海にそそいでいたことがこの付近に残る水田畝畦からもわかる。各分流の間の微高地上には、岩倉遺跡の他にも上東遺跡、下庄遺跡、才楽遺跡、岡山市川入遺跡など弥生時代以降に発展を遂げた遺跡群が存在している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代には瀬戸内海がまだ形成されておらず、庄付近は北から南へ足守川とその支流が流れていたと考えられる。今日では平野部の地形を推定するすべはないが、いくつかの丘陵上で当時の遺物を確認できる。岡山市吉備津杉尾西遺跡では安山岩製のナイフ形石器や角錐状石器、玉髄製掻器などがまとまって出土している[1]。また、岩倉遺跡の北方の王墓山古墳の墳丘上でも安山岩剥片に混ざって安山岩製角錐状石器が採集されている。

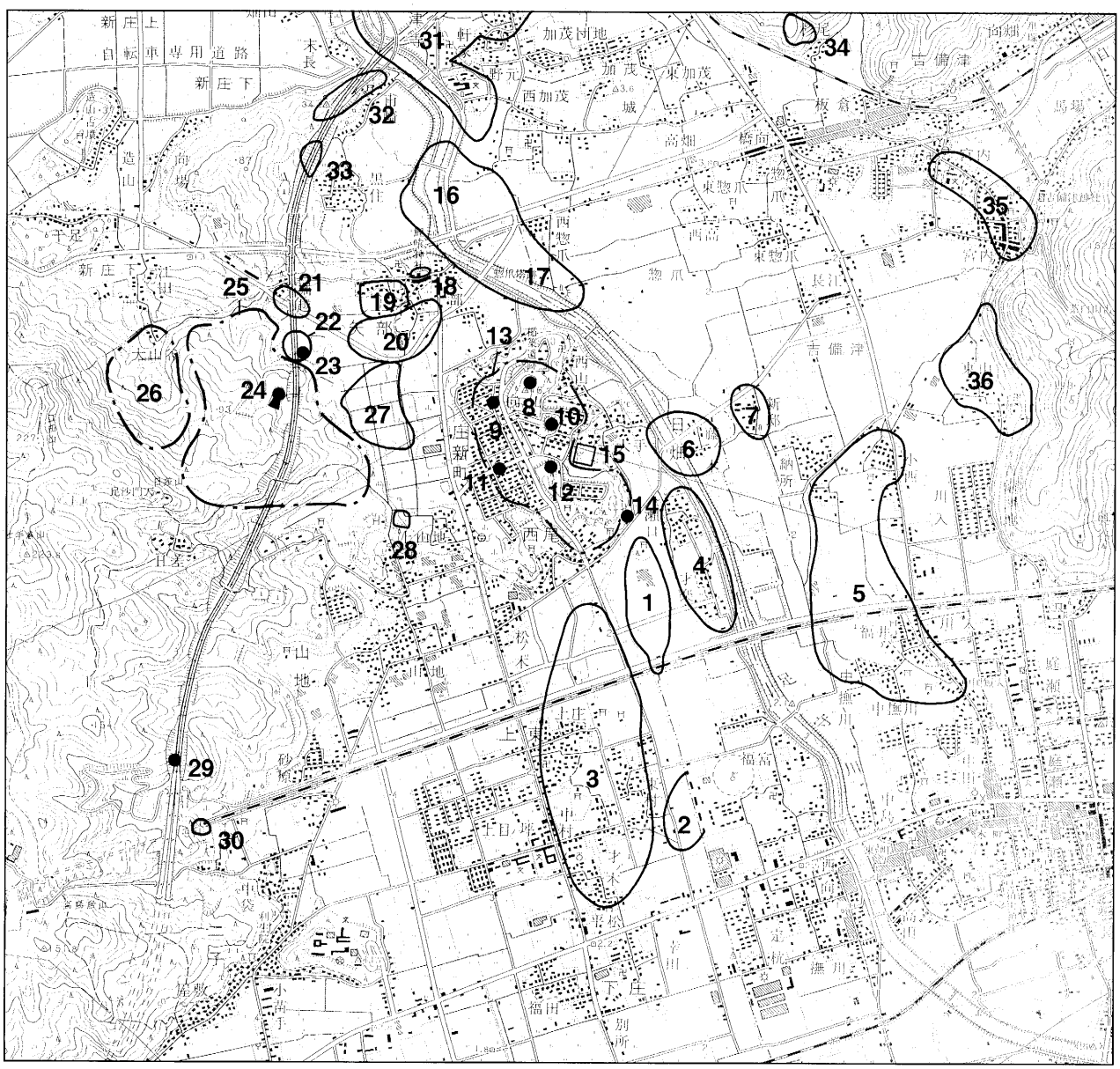
約1万年前に縄文海進によって瀬戸内海が形成されると、この付近にも海が入り込んできて、現在の丘陵裾部に点々と貝塚が形成されるようになる。岩倉遺跡のすぐ北には、西尾貝塚[2]が所在し、ハイガイ、カキ、シジミなどとともに縄文後期の中津式土器が検出されている。また、北に約2.0kmの矢部貝塚では山陽自動車道の建設に伴って発掘調査が行われ、中期後半から後期前半の土器を出土している[3]。貝層は汽水域に棲息するヤマトシジミが90％以上を占め、足守川が運んでくる土砂により、沖積化が進んでいった様子をうかがわせる。

弥生時代には沖積化がかなり進んでいたようで、沖積地の微高地上に集落が営まれるようになる。王墓山丘陵の南側には岩倉遺跡を含め、上東遺跡などの大規模集落が所在する。上東遺跡では新幹線の建設等、数度の発掘調査によって弥生時代後期を中心とする多くの遺構・遺物が確認されてい

る[4]。最近の道路建設に伴う発掘調査では弥生時代後期の波止場状遺構も確認されている[5]。

また、こうした集落を営んだ人々の墳墓は丘陵上を中心に分布している。王墓山丘陵上にも辻山田遺跡・女男岩遺跡・楯築遺跡[6]が存在し、発掘調査によって弥生時代後期から末期にかけての墳墓の実態が明らかにされている。

古墳時代になると、王墓山丘陵やその西側にあたる矢部から二子にかけての丘陵上に数多くの古墳が築かれるようになる。前半期の古墳としては墳長50mを測る前方後円墳である矢部大坑古墳があ



1 岩倉遺跡	7 新邸遺跡	13 王墓山古墳群	19 矢部遺跡	25 矢部古墳群	31 津寺遺跡
2 下庄遺跡	8 楯築遺跡	14 西尾貝塚	20 矢部寺田遺跡	26 矢部大山谷古墳群	32 甫崎天神山遺跡
3 上東遺跡	9 西の平古墳	15 日畑廃寺	21 矢部堀越遺跡	27 伊能軒遺跡	33 雲山遺跡
4 才楽遺跡	10 法伝山古墳	16 足守川加茂遺跡	22 矢部奥田遺跡	28 若宮神社東遺跡	34 杉山西遺跡
5 川入遺跡	11 女男岩遺跡	17 矢部南向遺跡	23 矢部貝塚	29 二子14号墳	35 吉野口遺跡
6 藤ノ木遺跡	12 王墓山古墳	18 鯉喰神社遺跡	24 矢部大坑古墳	30 二子御堂奥古窯跡群	36 東山遺跡

第２図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

る。発掘調査は行われていないが、この古墳から出土したとされる特殊壺形土器から最古式の前方後円墳の一つと考えられている。古墳時代後期には100基近い横穴式石室墳が築かれるようになる。中でも王墓山古墳は、浪形石の家形石棺を持つ横穴式石室墳である[7]。王墓山古墳に続く首長墓は、南西に約2.5km離れた山上に築かれた二子14号墳[8]である。一辺14m程の方墳で、切石に近い石材を用いた終末期古墳である。この古墳の麓には7世紀初頭から始まる二子御堂奥窯跡群[9]が営まれ、倉敷市内最古の寺院である日畑廃寺[10]の瓦もここで焼成されている。

庄地区の北端に沿っては古代山陽道が通っていたと推定されている。岩倉遺跡の北1.8km程に位置する矢部遺跡は、古代山陽道に置かれた備中で最初の駅家である津峴駅家と推定されている。北に2.5km程の所には山陽自動車道岡山ジャンクションがあるが、この建設の際に調査された岡山市津寺遺跡では掘立柱建物などが確認され、郡衙の周辺部と推定されている[11]。また、東に2km程に位置する岡山市川入遺跡では平城宮式の瓦等も出土しており、郡津の可能性が推定されている[12]。

中世末には、足守川を挟んで織田・毛利両勢力が対峙し、羽柴秀吉による高松城水攻めの舞台となったのは有名である。王墓山丘陵から東に延びる一支丘上には日幡城が築かれていた。日幡城は毛利氏が織田信長の中国地方侵攻に対抗するために築いた境目七城のひとつである[13]。

このように岩倉遺跡の周辺は、多くの遺跡が存在しているが、特に弥生後期から古代にかけては著名な遺跡が集中している。その理由としては、足守川が運んできた肥沃な土砂によって形成された沖積平野が米作りに適していたことと、古代吉備の中心地であった総社平野への海からの玄関である吉備津を目の前にし、また、古代山陽道が通じるという交通の要衝であるということなどがあげられるだろう。

註

（1）柴田英樹ほか「吉備津杉尾西・奥田遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報2』岡山市教育委員会 2003
（2）藤田憲司「ＸＸＩ 周辺の遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974
（3）浅倉秀昭ほか「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82』岡山県教育委員会 1993
（4）柳瀬昭彦ほか「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第二集』岡山県教育委員会 1974
小林利晴ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158』岡山県教育委員会 2001
（5）高畑知功ほか「下庄遺跡 上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157』岡山県教育委員会 2001
（6）近藤義郎編『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992
（7）山本雅晴ほか「ＸⅧ 王墓山古墳（赤井西古墳群１号）」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974
（8）井上弘・亀山行雄「二子14号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』岡山県教育委員会 1993
（9）葛原克人ほか「二子御堂奥古窯址群の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第二集』岡山県教育委員会 1974
（10）小野雅明ほか「日畑廃寺」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第11集』2005
（11）高畑知功ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』岡山県教育委員会1998
（12）正岡睦夫ほか「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第二集』岡山県教育委員会1974
高橋伸二ほか「川入・中撫川（市道）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1999（平成11年度）』岡山市教育委員会2001
草原孝典ほか「川入・中撫川（市道2号線）遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報 2002（平成14年度）』岡山市教育委員会2004
（13）加原耕作編著『新釈備中兵乱記』山陽新聞社1987

第２章　調査に至る経緯と経過

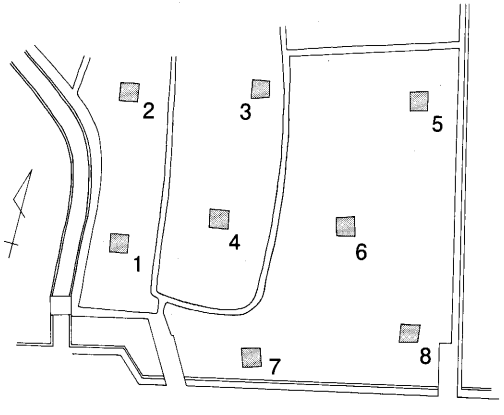
第１節　調査に至る経緯

岩倉遺跡の発掘調査は、倉敷市日畑字才の町に計画されたガソリンスタンドの建設に伴い実施されたものである。

当該地の南側に面している都市計画道路富本町三田線は、山陽新幹線の側道として、その南側を並行して走る県道岡山倉敷線の混雑緩和を目的に建設され、現在では倉敷と岡山駅西側の市街地とを結ぶ幹線道となっている。当該地は、こうした通行量の多さが見込まれる路線沿いであり、また将来現在の道路に直交する新しい路線も計画されており、ちょうどその交差点に当たる好立地ということもあって、ガソリンスタンドの建設が計画されたものである。

第３図　調査地位置図（S=1/10,000）

当該ガソリンスタンドの建設計画にあたっては、当該地が周知の遺跡である岩倉遺跡の範囲に含まれているため、事業の計画段階であった平成元年度に倉敷市教育委員会文化課（当時）と事業者の間で開発事前協議が行われた。当該地の南に隣接する地域では、昭和47年から48年にかけて山陽新幹線の建設に伴う発掘調査と、それに続く昭和50年から56年にかけての新幹線側道にあたる都市計画道路の建設に伴う発掘調査がそれぞれ行われている。それらの調査によると、当該地は亀川と呼ばれる旧河道の東岸の微高地付近にあたり、大量の土器とともに多くの土壙や溝などが検出されており、当該地内にもそうした遺構の存在する可能性が高いと思われた。開発協議では、そうした従前の発掘調査の結果を踏まえ、当該地における遺跡の性格や残存状況を正確に把握するため、事前に範囲確認調査を実施することで合意をした。



第４図　確認調査トレンチ配置図
（S=1/800）

これを受けて、平成元年2月20日から同年3月2日にかけて、倉敷市教育委員会により遺跡確認調査が実施された。調査は約1,300㎡の建設予定地内に2ｍ×2ｍのトレンチを任意に８か所設定し、土層の観察を中心に遺構・遺物の確認を行った。調査の結果、すべてのトレンチから多くの土器片とともに、弥生時代の土壙や溝などの遺

構が検出され、調査対象区のほぼ全域にわたって遺跡が存在していることが判明した。また当該地周辺は、以前に行われた水田面の地下げにより削平を受けており、遺構面は耕作土の直下の浅い位置に存在していることもあわせて明らかとなった。

こうした確認調査の結果から、倉敷市教育委員会では、当該ガソリンスタンドの構造物の建設にあたっては、盛土工法等できるだけ遺跡に影響を及ぼさないような設計を行うよう要望するとともに、やむを得ず遺跡を掘削する部分については、文化財保護法の規定による届出を行った上で、遺跡の記録保存のための調査を実施することが必要である旨を通知した。

その後、協議を重ねた結果、ガソリンスタンドの販売室棟については遺跡に影響を及ぼさない盛土工法とすることとなったものの、2か所の地下タンク部分と擁壁およびサインポールの基礎部分については、遺構面を掘削せざるを得ないこととなった。このため、やむを得ず遺跡に影響を及ぼすと考えられる範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。このことにより建設計画が決定し、平成2年9月17日付けで東真産業株式会社から埋蔵文化財発掘届が提出され、発掘調査が実施されることとなった。

第2節　調査の経過

岩倉遺跡の発掘調査は、平成2年11月13日から平成3年2月15日にかけて実施した。

調査対象地は、工事により掘削される2か所の地下タンク部分と擁壁およびサインポールの基礎部分に限定したため、コの字型をした不整形な調査区となった。調査面積はあわせて360㎡となり、基本的に調査員2名で対応することとした。

調査は、まず調査区南東の約167㎡の地下タンク部分から着手した。確認調査でみられたとおり、周辺は水田への揚水のため地下げが行われたと考えられ、耕作土の直下ですでに土器が検出される状態であった。このため、遺構の検出にあたって弥生時代のものと古代・中世のものがほぼ同一の面でみられる状態となり、各遺構の時期の決定に当たっては、遺構内の埋土の差異と出土遺物を手がかりに判断せざるを得ない状況であった。

南東の地下タンク部分の調査区では、弥生時代の溝である溝1が検出され、溝の中には大量の土器片が廃棄されていたため、その検出にはかなりの労力を要した。この後、擁壁の基礎部分に沿って反時計回りに掘り進んで行き、北辺の地下タンク部分に当たる調査区周辺では、溝とともに多くの柱穴群が検出された。また、調査の最後となった南西隅のサインポール部分の調査区では、弥生時代の井戸と住居跡が検出された。

調査も終盤にさしかかり、各遺構が掘り上がった状態となった平成3年1月19日には、遺跡現地説明会を開催し、地元住民を中心に約40名の参加があった。こののち、現地説明会まで残しておいた溝1の土器群の取り上げを行い、溝の底面及び掘りかた部分の確認を行った。また、遺跡の基盤層を確認するための掘り下げも行った。2月12日に調査の終了した部分から順次埋め戻しを開始し、2月15日にはすべての作業を完了し、機材の撤収を行った。

調査日誌抄

《平成２年》

11月 13日	機材搬入。南東地下タンク部分の耕作土除去。
11月 14日	遺構検出作業開始。
11月 19日	中世溝状遺構掘り下げ。
11月 22日	グリッド杭設定。
11月 29日	溝6・溝7遺構実測。
12月　4日	弥生時代溝状遺構掘り下げ、土器検出。
12月　7日	弥生時代柱穴群掘り下げ。
12月 19日	東側及び北側東半部分の擁壁部分の耕作土除去。
12月 20日	北側地下タンク部分の耕作土除去。
12月 21日	溝１全景写真撮影。

《平成３年》

1月　7日	溝1土器群実測開始。
1月　8日	北辺部弥生時代遺構掘り下げ。
1月 11日	西側擁壁部分、サインポール部分の耕作土除去。
1月 16日	北辺部弥生時代遺構実測。
1月 17日	リモコンヘリによる航空写真撮影。
1月 18日	倉敷市文化財保護審議会委員視察。
1月 19日	遺跡現地説明会開催。
1月 22日	溝1土器取り上げ開始。
2月　4日	井戸、住居跡掘り下げ。
2月　7日	井戸、住居跡実測。
2月　9日	土層断面図実測。
2月 12日	南東部埋め戻し開始。
2月 15日	埋め戻し完了。機材撤収。

〔岩倉遺跡発掘調査委員会〕

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	安田貞夫	〃	教育次長
委　員	岡田三郎	〃	社会教育部長
〃	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会長
専門委員	福本　明	倉敷市教育委員会文化課	学芸員
〃	鍵谷守秀	〃	
〃	小野雅明	〃	
〃	谷岡孝久	〃	
監　事	三宅正廣	倉敷市教育委員会	社会教育部次長
事務局長	小野盛樹	倉敷市教育委員会文化課	課長補佐
書　記	香西文雄	〃	文化財係長

（肩書き及び役職名等はいずれも調査当時）

第３章　発掘調査の概要

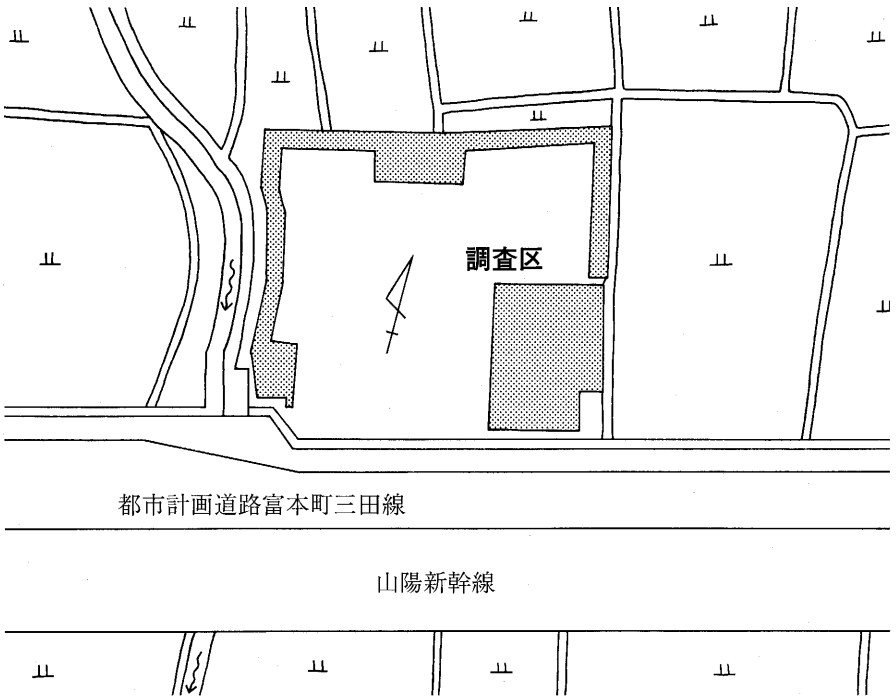
第１節　調査区の概要

岩倉遺跡は、足守川の中流右岸の微高地上に広がる遺跡で、弥生時代後期の遺跡として著名な上東遺跡の北東に隣接している。この微高地は北端の岩倉神社付近から南に向かってのびており、北部では弥生時代前期の土器の出土が知られている。南側は途中に河道や水路などでいくつにも分断されながら、700ｍほど続いているものと思われ、今回の調査地点は、その南端に近い部分にあたるものと思われる。

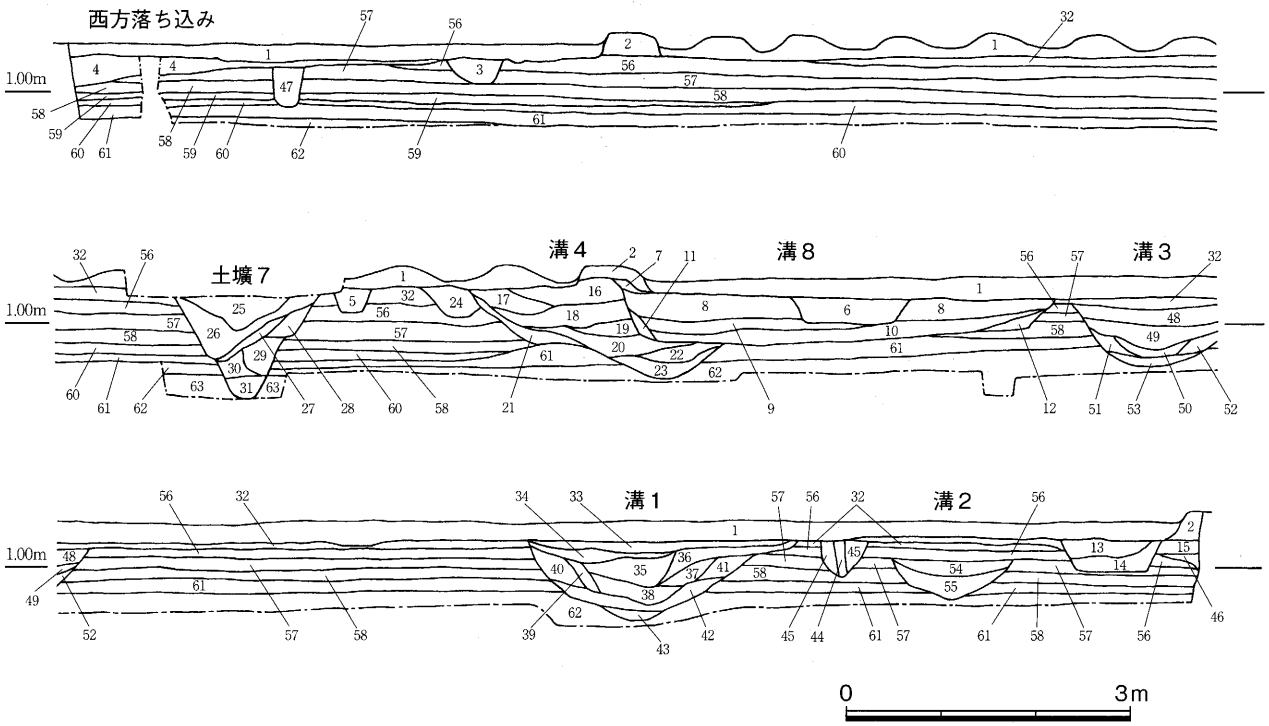
調査対象区は、ガソリンの地下タンク部分２か所と擁壁およびサインポールの基礎部分に当たる区域で、建設工事に伴い遺跡に影響を及ぼすと思われる範囲に限定した。調査区全体の面積は360㎡である。このうち最も面積の大きいのは、南東部の地下タンク部分で167㎡あり、北辺の地下タンク部分は51㎡となっている。擁壁部分は幅約２ｍのトレンチ状に細長い溝がコの字形に取り囲むような形となっており、南西隅のサインポールの基礎部分は25㎡ある。

調査区の現況は水田となっており、水田面での標高は約1.5ｍとなっている。一帯の水田は、用水の関係から以前に地下げが行われたと思われる。地下げによる削平は遺構面にまで達しており、浅いところでは水田面から15㎝ほどの深さで遺構が検出されている。このため、弥生時代の遺構と古代から後の遺構とが重複して検出される場合が多く、遺物を伴わない土壙などについては、時期の特定が困難なものもいくつかみられた。

調査区全体の基本的な層序については、先述したように水田耕作土の直下に厚さ10㎝ほどの茶灰色土がみられ、土壙や溝などほとんどの遺構が、この層の上面から検出されている。茶灰色土の下は弥生土器片を含む厚さ約10㎝の淡茶褐色粘質土と、ほとんど遺物を含まない褐灰色粘質土が続く。その下には遺物を含まず、マンガン粒の沈着が著しい厚さ10～20㎝の黄褐色砂質土となり、この層が遺跡の基盤となる層に相当するものと思われる。さらに下には、黄灰褐色粘土、灰白色粘土、青灰



第５図　調査区全体図（S=1/800）



《土層註記》

1. 耕作土
2. 畦畔
3. 黒褐色土
4. 暗黄灰褐色砂質土
5. 黒褐色土
6. 茶褐色粘質土
7. 灰色砂質土
8. 灰茶褐色土
9. 灰褐色粘質土
10. 黄灰褐色土
11. 淡灰褐色土
12. 灰茶褐色土
13. 淡黄灰色粘質土
14. 淡灰色粘質土
15. 黄灰褐色粘質土
16. 淡茶灰色土
17. 淡黒褐色土
18. 暗黄茶褐色土
19. 暗茶灰色土
20. 淡灰褐色土
21. 暗灰褐色土
22. 黒褐色土
23. 青灰色粘土
24. 黒褐色土
25. 暗茶褐色土
26. 黒褐色土
27. 黒灰褐色土
28. 暗茶褐色土
29. 暗黄灰褐色土
30. 暗灰褐色土
31. 暗青黒灰色土
32. 暗茶灰色土
33. 暗灰茶色粘質土
34. 茶灰色粘質土
35. 褐灰色粘質土
36. 茶褐灰色粘質土
37. 淡褐灰色粘質土
38. 褐灰色粘質土
39. 灰茶褐色粘質土
40. 淡褐灰色粘質土
41. 淡茶灰色粘質土
42. 淡黄褐灰色粘質土
43. 灰色粘土
44. 灰茶色粘質土
45. 茶褐色粘質土
46. 淡灰色粘質土
47. 淡黒灰色土
48. 淡褐色粘質土
49. 淡灰茶褐色粘質土
50. 茶灰色粘質土
51. 褐灰色粘質土
52. 褐灰色粘質土
53. 暗灰色粘質土
54. 茶灰色土
55. 青灰色粘質土
56. 茶灰色土
57. 明黄褐色砂質土
58. 暗灰褐色土
59. 淡灰褐色土
60. 暗黄灰色土
61. 暗黄灰褐色粘質土
62. 灰白色粘土
63. 青灰色粘土

第６図　調査区北辺部北壁断面図（S=1/80）

色粘土などの粘土層が堆積している。調査区全体で見ると、これらの土層は東方に向かって緩やかに傾斜していることがわかる。

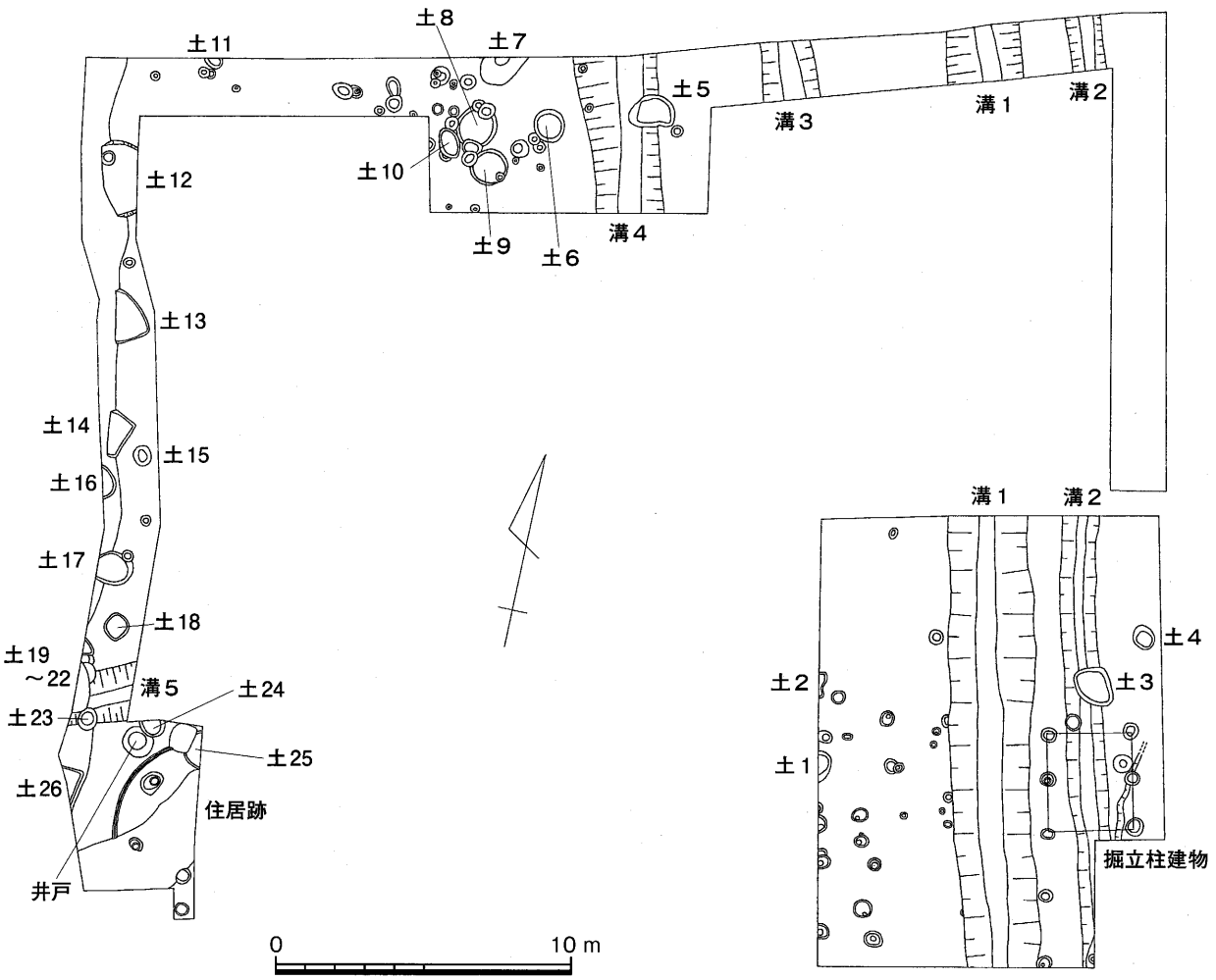
遺構としては、弥生時代後期から中世にかけてのものがみられ、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙・柱穴・溝などが検出されている。このうち溝は、多くが南北方向に走っており、土壙群は調査区南東部と北辺部に集中してみられた。また調査区の西端では、南北方向の調査区の辺に沿うように西側に向かって落ち込みが確認されている。この落ち込みは、山陽新幹線及び都市計画道路に伴う発掘調査で確認されている旧河道のうち、亀川と呼ばれる河道の東岸にあたる部分ではないかと考えられる。

遺物は、弥生時代後期の土器片が多くを占めている。そのほか古代・中世の土器片や分銅形土製品、勾玉形土製品、鉄製手斧などの遺物も検出されている。とくに溝1からは溝内に廃棄された状態で大量の弥生土器片が出土している。出土遺物の総量は、遺物収納コンテナ約70個分である。

第２節　遺構と遺物

１．弥生時代の遺構と遺物

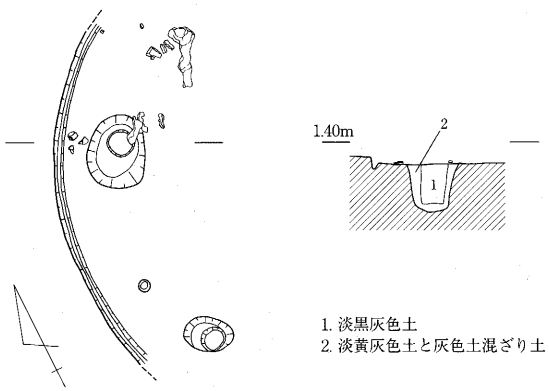
弥生時代の遺構としては、竪穴住居1・掘立柱建物1・井戸１・土壙26・ピット86・溝5が検出されている。これらは東に向かってわずかに傾斜している微高地上に存在しており、調査区のほぼ全面にわたってみられたが、土壙群は調査区の南東部と北辺部でまとまってみられ、溝は東半部において南北に走るものが多かった。遺物については、溝1内で大量に廃棄された土器群が検出されているほかは、遺構に伴う遺物はさほど多くは出土していない。



第７図　弥生時代遺構配置図（S=1/250）

（１）竪穴住居

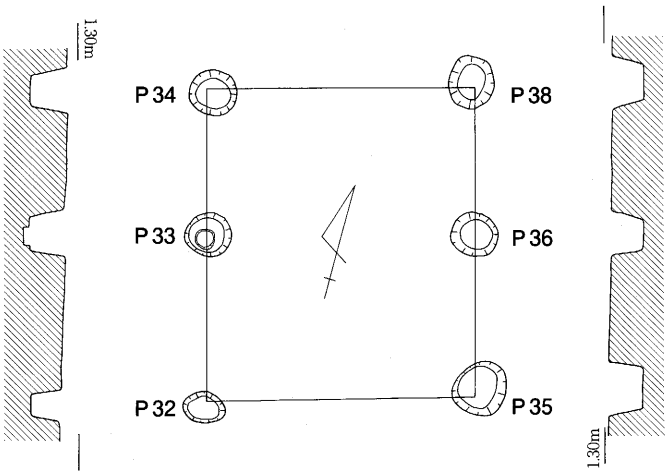
調査区南西部で検出された。上部は地下げ等で削平されており、床面までの堆積土の厚さは10cmあまりであった。また南側は近現代の溝によって大きく削り取られており、平面は全体の8分の1ほどしか残されていないが、直径が6ｍほどになる円形の住居跡と推定される。住居の壁際には、幅10cm、深さ6cmほどの壁体溝がめぐらされている。住居跡に伴う柱穴は、柱痕を持つものが2個検出されて



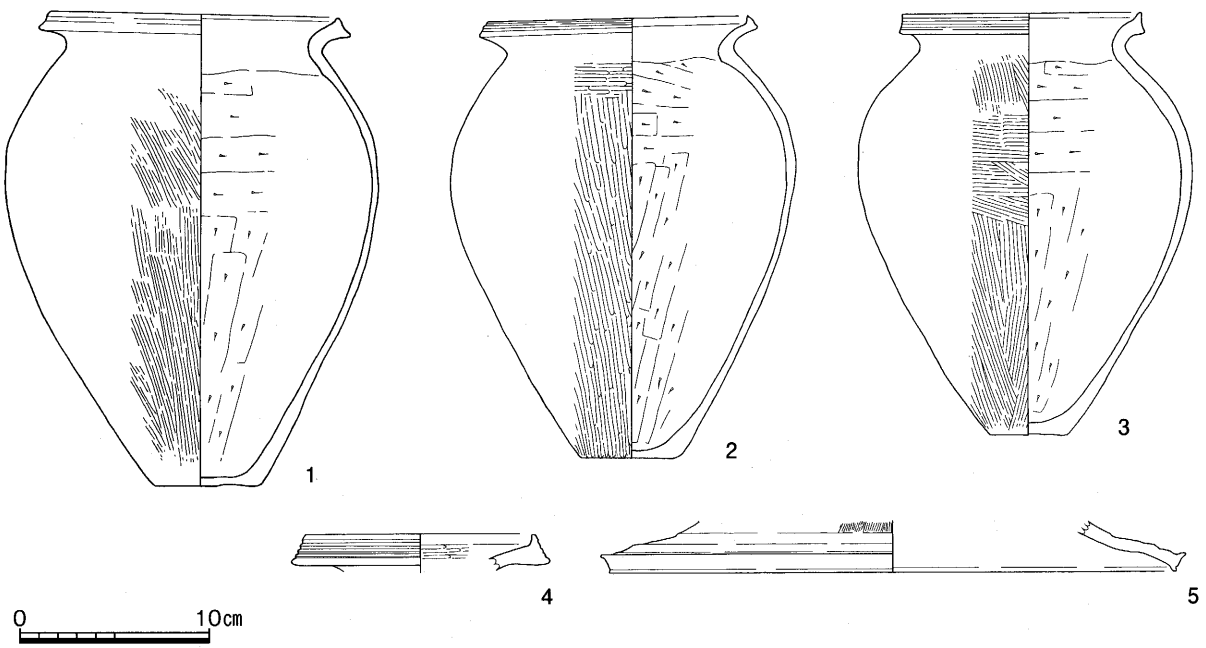
第８図　竪穴住居実測図（S=1/80）

（２）掘立柱建物

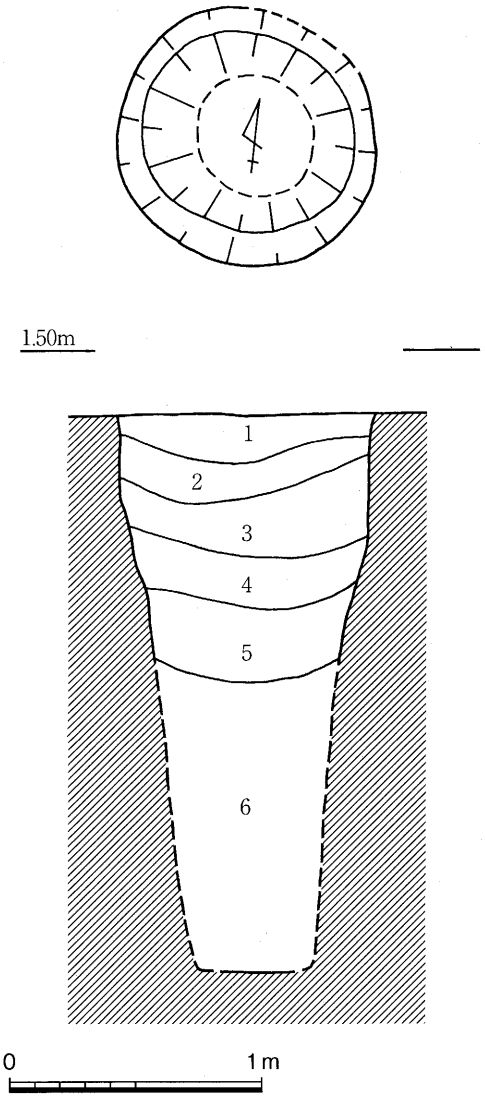
柱穴と思われる土壙は、調査区の南東付近と北辺部に集中する形で検出されているが、建物としてまとまるものは、南東部の1棟だけであった。柱穴は、溝1の東側の肩沿いに並行するように南北に3個あり、これに対応するように溝2を挟んで3個が平行して検出されている。建物の規模は桁行3.3～3.4m、梁間2.8～2.9m、柱間は1.6～1.8mとなる。柱穴の掘りかたはいずれもやや歪な円形で、径34～58cm、検出面からの深さは35～38cmを測り、P33には径20cmの柱痕が残されていた。遺物は、P32とP37を除き、いずれも埋土中に弥生土器の小片が少量いる。東側の柱穴掘りかたは、80cm×60cmのやや不整形な楕円形を呈しており、柱痕の直径は28cmで、残存している深さは42cmあった。西側のものは、溝の北側の肩部で新しい土壙に切られたかたちで検出されており、同様に直径25cmほどの柱痕が残されていた。この2本の柱の間隔からすると6本柱であったと推定される。遺物としては、床面の南よりの部分で炭と焼土が検出されたほかは、少量の弥生時代後期の甕片が出土したのみで、図化できるものはなかった。



第９図　掘立柱建物実測図（S=1/80）



第10図　井戸出土遺物（S=1/4）



第11図　井戸実測図（S=1/30）

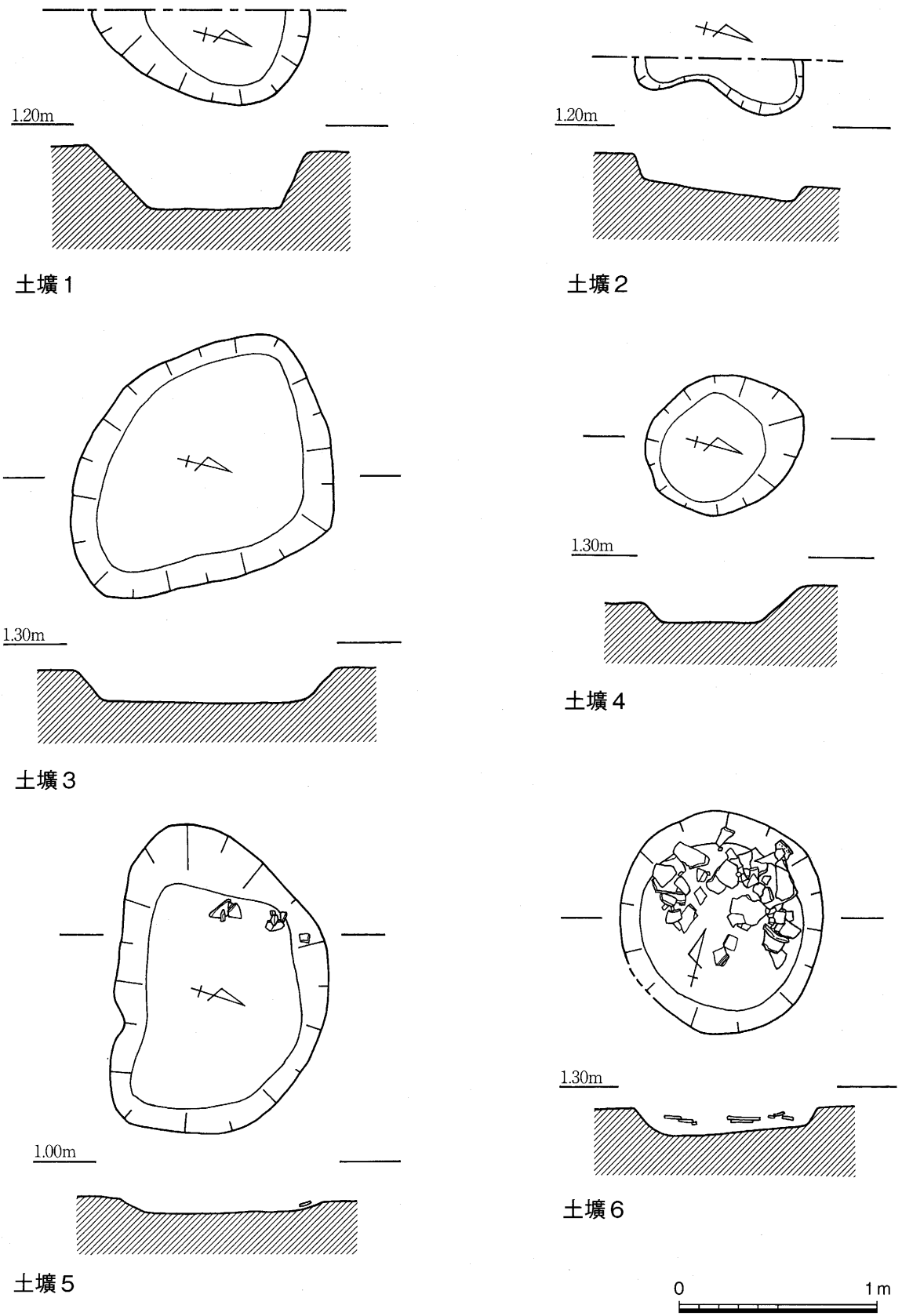
ずつ含まれていたが、図化できるものはなかった。

（3）井戸

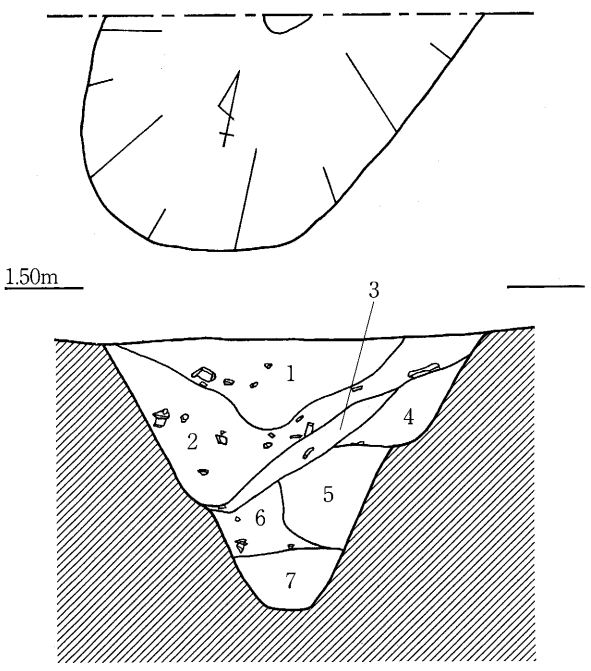
調査区南西部で、竪穴住居の北西に隣接して検出された。掘りかたの一部をP104に切られているものの、直径約1mの円形を呈する素掘りの井戸である。検出面からの深さが約2.25mにおよぶもので、底面のレベルは海抜マイナス1mほどとなる。井戸内部は、検出面から80cmほど下で、径が60cmほどにすぼまっている。それ以下は掘り下げの途中で周辺の土砂が崩落してきたため、十分な調査が行えなかった。遺物については、井戸の上層の茶灰色土からは弥生時代後期の土器細片がビニール袋1袋分ほど出土しているが、図化できるものはなかった。しかしながら、下層の青灰色シルト層中の底面に近い位置からは、出土状態は明確にできなかったものの、ほぼ完形の甕3点（1～3）が出土している。甕は、3点とも外面全体に煤が厚く付着しており、頻繁に使用されていた甕をそのまま井戸に入れたものと思われる。1は口縁端部を内傾して上下に肥厚させ、凹線を施すもので、胴部外面上半は右下がり、下半は縦方向のハケメを施す。内面の調整は、上半は横方向、下半は縦方向のヘラケズリとなっている。2は口縁端部の上端を引き出し、外面に凹線を施しているものである。体部外面にはていねいなヘラミガキが施され、肩部上半のみ横方向、以下は縦方向のものとなっている。内面は頸部までヘラケズリが及んでおり、肩部は横方向、胴部下半は縦方向となっている。3は口縁端部を上方に引き出して、端面に櫛描きの沈線を施すものである。体部外面は、肩部のみが横位、ほかは縦方向ハケメ調整が施されている。内面は、上半が横位、下半が縦のヘラケズリとなっている。4は小型の器台の口縁部と思われる。口縁端部を内傾して上方に拡張し、端面に凹線を施している。内面には横方向のていねいなヘラミガキが施されている。5は器壁が薄いが、器台の脚部と思われる。裾部には幅広の凹線をめぐらせ、端部は上下に拡張している。筒部下端にはハケメがみられる。

（4）土壙

弥生時代の土壙として26基を検出した。土壙は、調査区の西辺で多く確認されており、北側調査区の中央付近でもまとまって検出されている。ほとんどの土壙は上部が削平を受けているため浅く、残存状態のよくないものが多い。これらのうち比較的多くの土器片が含まれているものは、土壙6･7･9・11であり、その他は少量の弥生土器片がみられた土壙が13基、遺物の検出されなかった土壙が9基あった。

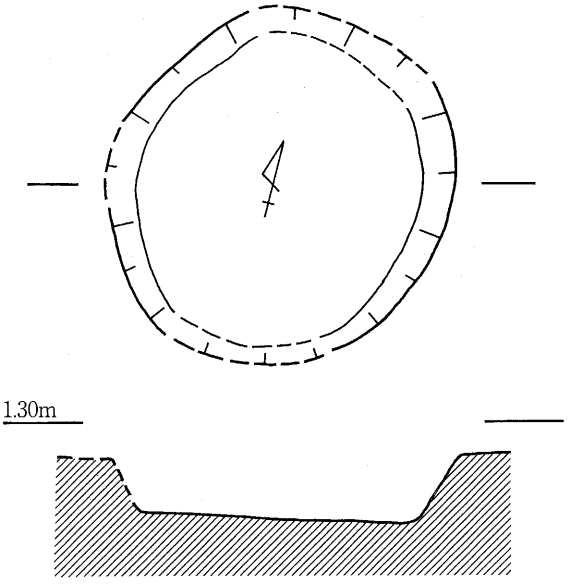


第12図　土壙実測図１（S=1/30）

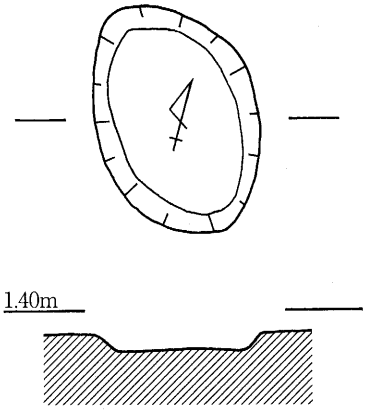


土壙７

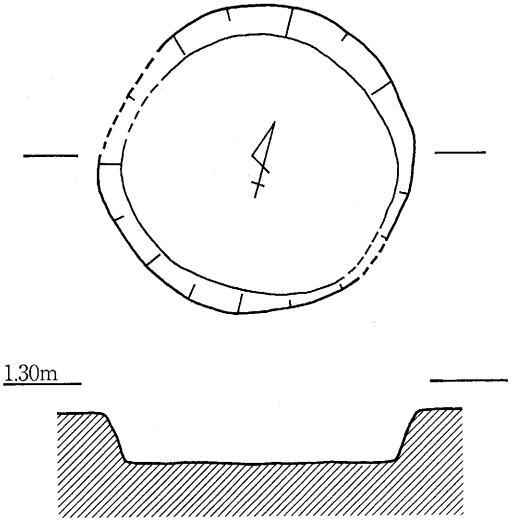
1. 暗茶褐色土　5. 暗黄灰褐色土
2. 黒褐色土　6. 暗灰褐色土
3. 黒灰褐色土　7. 暗青黒灰色粘土
4. 暗茶褐色土



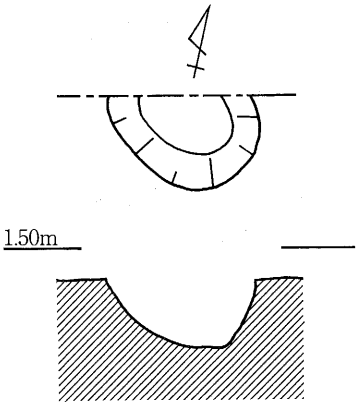
土壙８



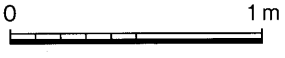
土壙10



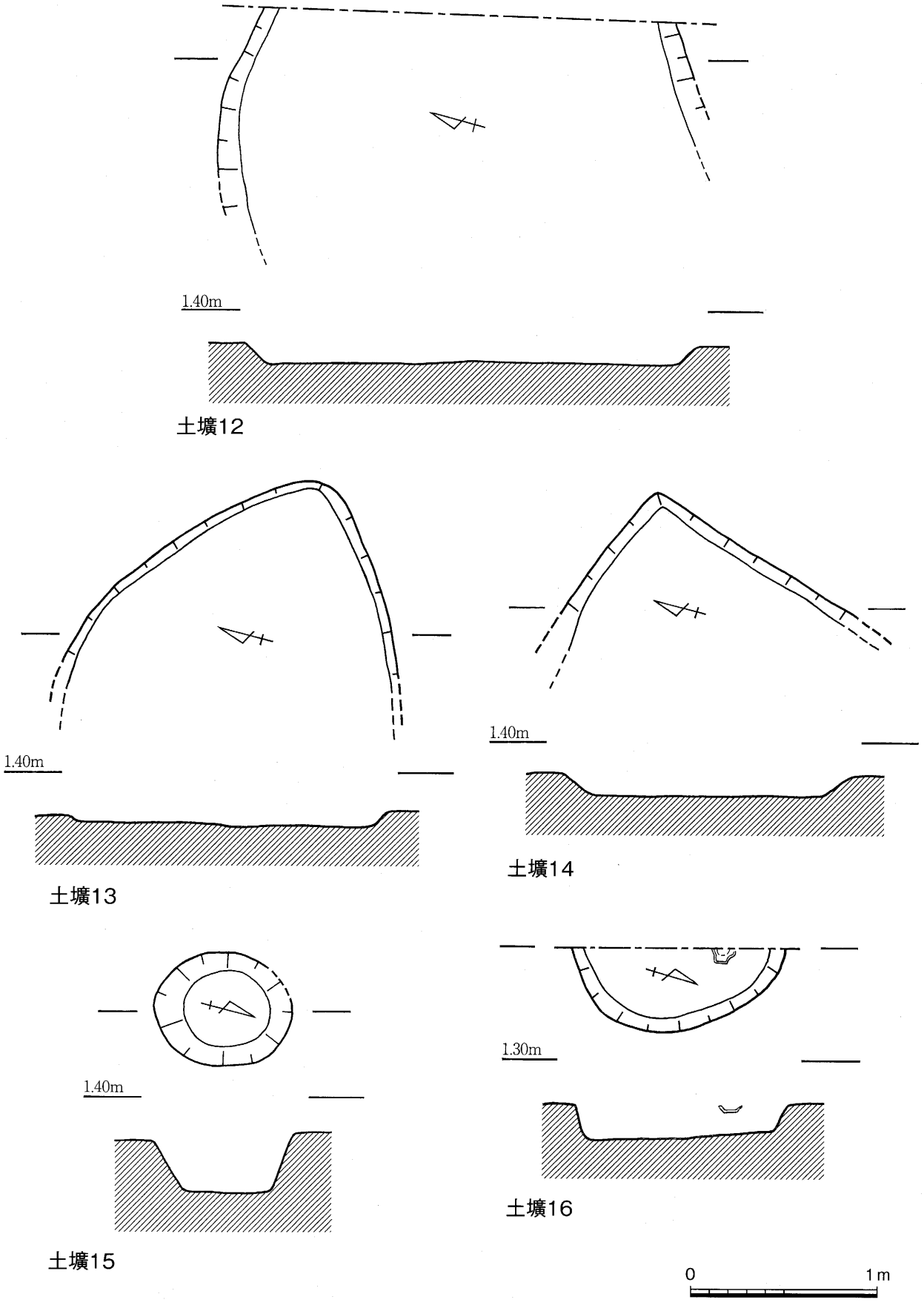
土壙９



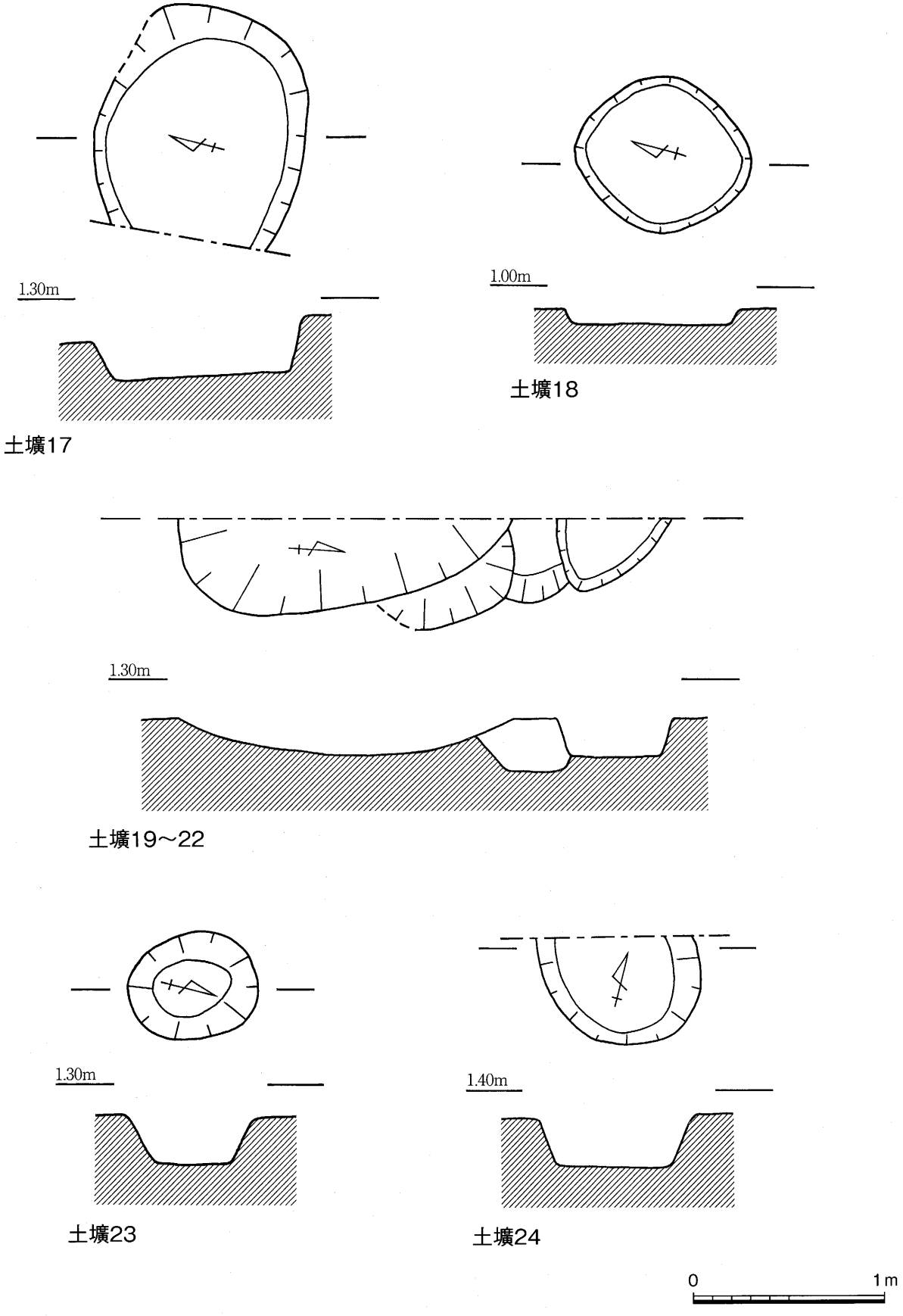
土壙11



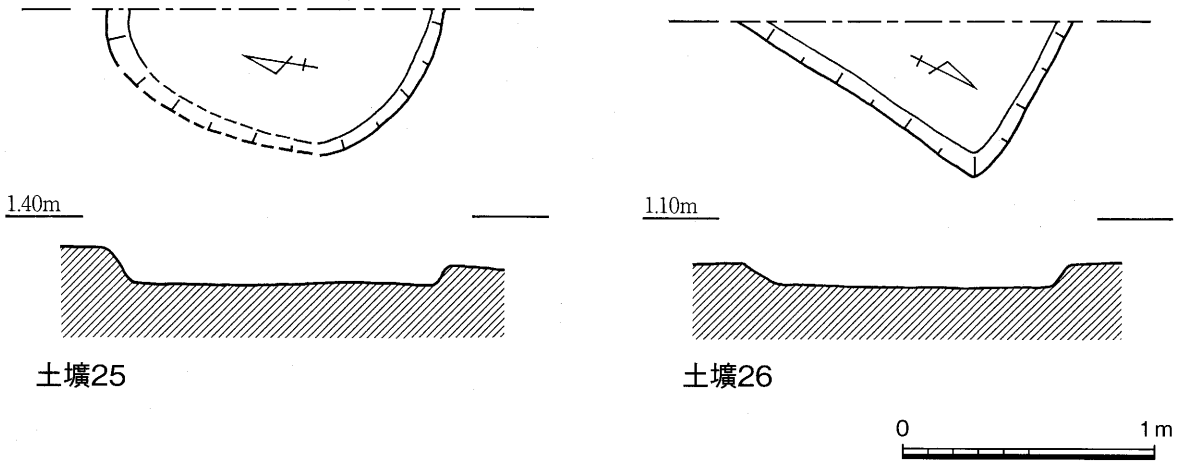
第13図　土壙実測図２（S=1/30）



第14図　土壙実測図３（S=1/30）



第15図　土壙実測図４（S=1/30）



第16図　土壙実測図５（S=1/30）

土壙１

南東部の調査区の西壁沿いで、東半部のみが検出されている。楕円形を呈するものと思われ、検出面での最大径は107cm、深さ28cmを測る。土器片等の遺物は含まれていない。

土壙２

土壙１から北側へ2mほど離れた壁沿いで検出された。全容は不明であるが、中央部がくびれた形態をしている。最大長84cm、深さは9～13cmである。土壙内からは弥生時代後期の少量の土器片が出土している。

土壙３

溝２を切って掘り込まれている。上部は削平を受けており、底から18cmほどが残されている。不整形で、最大158cm、最小115cmの規模である。土壙内からは、弥生時代後期の土器片が少量検出されている。

土壙４

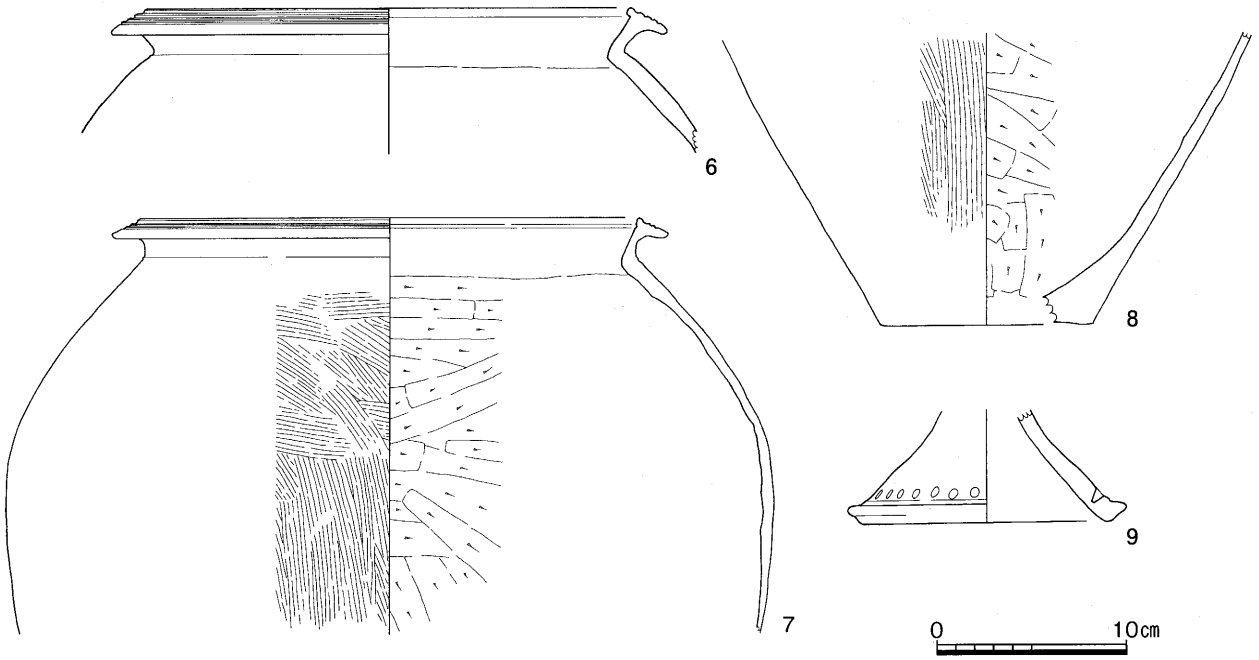
調査区東端で検出されている。長径82cm、短径68cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。土壙内からは弥生時代後期の土器片が少量出土している。

土壙５

調査区北辺の溝４の底から検出された。このため上部は削平され、わずかに8cmほどが残されているのみである。平面形は不整形な楕円で、長径156cm、短径107cmの規模をもっている。土壙内からは弥生時代後期の土器片が少量検出されている。

土壙６

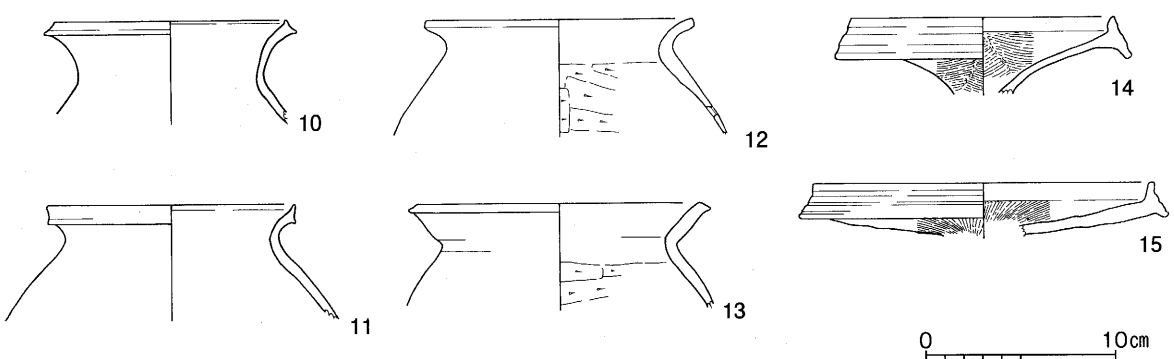
調査区北辺にある土壙群のうちのひとつ。ほぼ円形を呈しており、直径は約100cm、深さは15cmである。土壙内には甕や高坏などの弥生土器片が検出されている。**6**・**7**は甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は強く内傾して上下に拡張しており、端面には凹線を施している。7の体部外面の上半には右下がりのハケメ、下部には縦方向のハケメを施し、内面には頸部までヘラケズリが行われている。**8**は甕の底部である。外面には縦方向のハケメ、内面はヘラケズリが施されている。**9**は高坏の脚部である。端部を斜め上方に張り出させ、貫通しない円形の孔を巡らしている。



第17図　土壙６出土遺物（S=1/4）

土壙７

北壁にかかって出土しており、北半分は調査区外となっている。形状は楕円形を呈するものと思われ、120cm×150cmほどが検出されている。断面形は段のあるＶ字型をしており、深さは109cmを測る。土壙内からは、壺、甕、小形器台等が出土している。10は頸部から緩やかに外反し、口縁端部は上下に肥厚させて凹面をつくっているもので、壺とした。調整は器表面が磨滅しているためはっきりしない。11～13は甕である。11は口縁端部を上方に引きのばし端面をつくっているもの。12は頸部から短く屈曲させて、口縁端部を丸くおさめているもので、内面のヘラケズリは頸部に及んでいる。13は「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、端部はわずかに下方に拡張して面をなしている。内面のヘラケズリは頸部に及んでいる。14と15は小型の器台である。14は口縁部を内傾させて上下に拡張し、凹線を施している。調整は内外面ともにていねいな弧状のヘラミガキを施している。15は口縁端を直線的に開き、端部を上下に拡張させて、端面に凹線を施している。調整は内外面ともに放射状にヘラミガキが施されている。



第18図　土壙７出土遺物（S=1/4）

土壙８

土壙６の西に位置する。周りを4個のピットにより切られているが、直径136cmほどのほぼ円形を

呈しており、深さは27cmを測る。土壙内からは、弥生時代後期の土器片が少量出土している。

土壙９

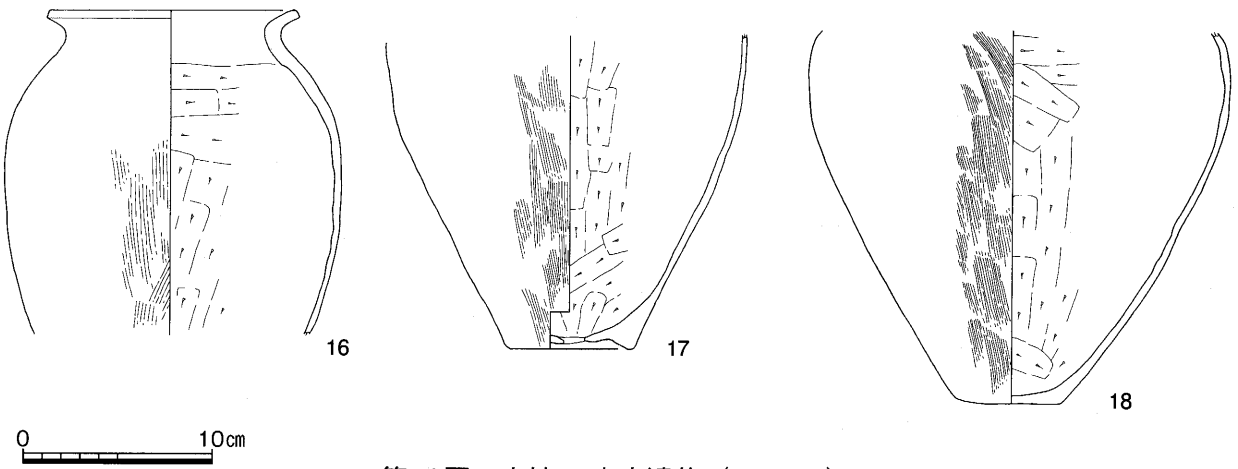
土壙８の南に隣接する位置にある。円形を呈しており、直径は123cm、深さは20cmある。土壙内からは、弥生時代後期の土器片が少量出土している。

土壙10

土壙８の西側に接して存在している。長径98cm、短径65cmの楕円形を呈しており、深さは7cmほどが残されているのみである。土壙内から遺物は検出されていない。

土壙11

調査区北辺の西寄り、北壁の断面にかかって出土している。長径70cm、短径50cmほどの楕円形を呈するものと思われ、深さは28cmを測る。土壙内からは弥生土器の甕等が出土している。**16**は「く」の字形に屈曲する口縁部をもつ甕で、外面には縦方向のハケメ、内面上部は横方向のヘラケズリ、下半は縦方向のヘラケズリを施している。**17**・**18**は胴部から底部にかけての破片である。外面には縦方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。**17**の底部には焼成後の穿孔がみられる。



第19図　土壙11出土遺物（S=1/4）

土壙12

調査区北西部に位置する。西に向かう落ち込みの肩部で検出されている。西半は削平されており、東側は調査区外となっている。最大幅は260cmと大きいが、深さは10cmほどしか残されていない。土壙内の埋土には少量の弥生土器片が含まれていた。

土壙13

土壙12と同様の位置にあり、埋土も同質のものである。西半分を削平されており、現況では1辺が170cmと112cmの三角形状を呈しているが、もとは方形であった可能性がある。深さは9cmほどと浅い。埋土中からは遺物は検出されていない。

土壙14

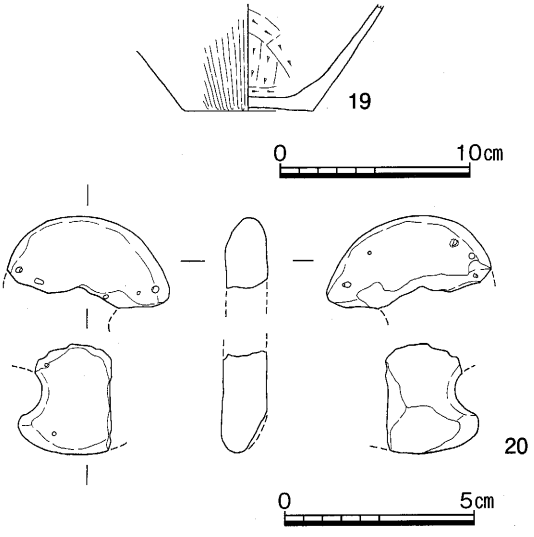
土壙12・13とよく似た形状を呈しており、埋土も同質である。西半分を落ち込みにより削られているが、方形を呈するものであったと思われる。現存する辺はそれぞれ86cmと128cmとなっており、深さは11cmである。土壙埋土中からは弥生時代後期の土器片が少量出土している。

土壙15

土壙14の東側にある。長径68cm、短径56cmの楕円形を呈している。深さは25cmある。土壙内から遺物は検出されていない。

土壙16

土壙14の南側で、調査区西壁の断面にかかって出土している。やや歪な円形を呈すると思われ、直径は約115cmある。土壙上部は西に向かう落ち込みによって削平され、深さは20cmほどが残されている。土壙内からは少量の弥生後期の土器片と分銅形土製品が出土している。19は甕の底部である。外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはヘラケズリが施されている。20は小型の分銅形土製品である。2片あり、同一固体であると思われるが、接合できなかった。全体に指頭によるナデが施されて、端面は丸くおさめており、厚さは1.1cmある。浅いくりこみ部の周囲に刺突文がみられ、それぞれの先端に近いところにひとつずつ貫孔がある。



第20図　土壙16出土遺物
（S=1/4・1/2）

土壙17

調査区西辺の断面に一部がかかって出土している。楕円形を呈しており、短径は111cm、長径は120cm以上ある。深さは30cmあるが、西側は削平を受けている。土壙内からは弥生時代後期の土器片が少量出土している。

土壙18

土壙17の南に位置する。72cm×78cmの隅丸方形を呈している。上部は削平をうけており、深さは8cmほどしか残っていない。土壙内から遺物は検出されていない。

土壙19・20・21・22

調査区南西部の壁に接して4基の土壙が切りあって存在している。いずれも部分的に検出されたのみで全容ははっきりしないが、土壙22は長径が176cm以上ある大形のものである。土壙21と土壙22は溝5及び溝9を切ってつくられている。いずれの土壙からも遺物は検出されていない。

土壙23

土壙22の南側に接して検出された。長径75cm、短径62cmの楕円形を呈しており、深さは32cmある。土壙内からは少量の弥生時代後期の土器片が出土している。溝5及び溝9を切ってつくられており、北側は土壙22に切られている。

土壙24

調査区南西部で井戸を切り込んでつくられている。北半は調査区外となっているが、楕円形を呈するものと思われ、短径は83cm、深さは28cmを測る。土壙内には人頭大の礫と弥生時代後期の土器片が少量含まれていた。

土壙25

土壙24の東側にあり、東半分は調査区外となっている。住居跡を切り込んでつくられていると思われるが、住居跡に接する部分に近現代の撹乱土壙が存在している。ほぼ円形を呈するものと思われ、直径は132cm、深さは13cmと浅いものである。土壙内には焼土と炭が含まれており、弥生時代の土器小片がわずかに検出されている。

土壙26

調査区南西部の西壁にかかって検出されている。方形を呈するものと思われ、検出されている辺は112cm×71cmある。西向きの落ち込みの中にあるため、上部は削平を受けており、深さは9cmほどしか残されていない。土壙内から遺物は検出されていない。

(5) 溝

弥生時代の溝として5条が検出されている。調査区の東半分で検出されている溝1から溝4の4条の溝はほぼ平行して北から南方向に流れているのに対し、調査区南西部にある溝5のみが東西方向にのびている。これらのうち、調査区東側で検出された溝1の埋土中から弥生時代後期の土器片が廃棄された状態で大量に出土している。

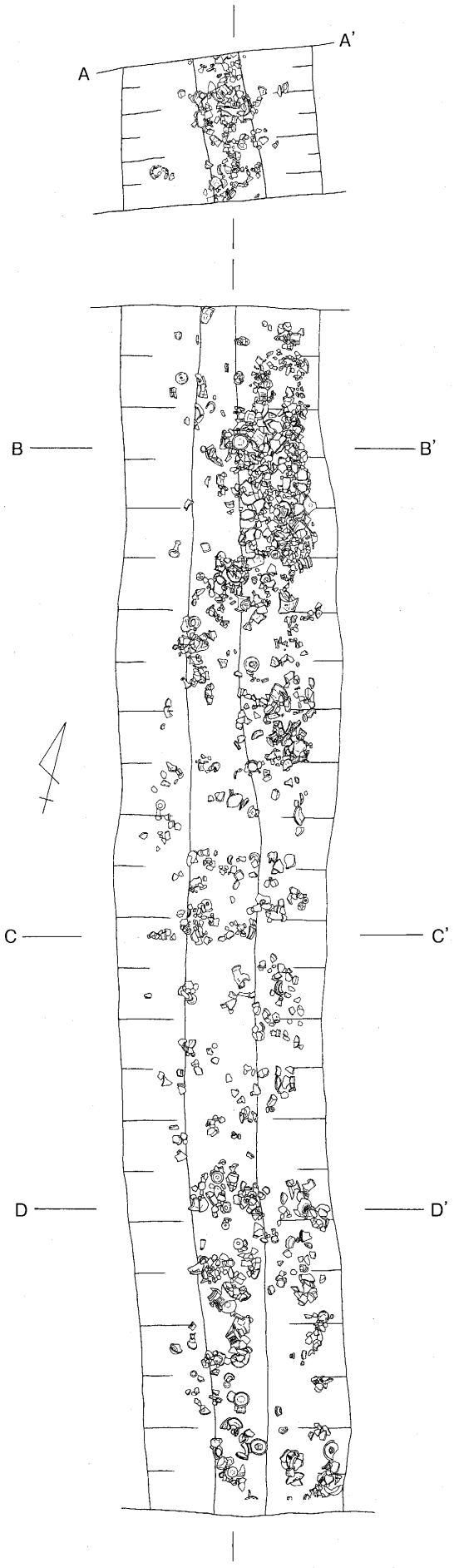
溝1

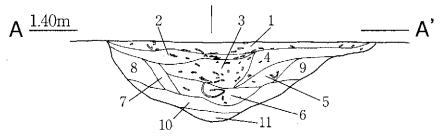
南東部の調査区の中央部を直線的に、北から南に向かって流走する溝で、調査区北辺でもその続きの溝が検出されている。溝の上面は後世の地下げなどにより削平を受けているが、上面での幅は2.6m～3.0m、検出面からの深さは72cm～84cmあり、底面はゆるやかな弧状を呈している。

出土遺物としては、溝の埋土中からは弥生時代後期の土器片が大量に出土しており、サヌカイト製の石包丁や石鏃なども検出されている。出土遺物はほとんどが溝の中層の暗茶灰色粘質土から出土したもので、溝底面からのものは少なかった。出土した弥生土器には長頸壺や甕、高坏、器台などがあり、ほかに製塩土器や分銅形土製品などもある。これらの土器類は保存状態が悪く、器表面が磨滅しているものがほとんどで、調整のはっきりしないものも多くみられた。

21～30は長頸壺である。21は口縁端部を内傾して上下に拡張し、端面に凹線を施している。頸部上端には1本だけ太い凹線を施し、下方にはハケメに使用したと思われる板状の工具による「ノ」の字状の刺突文がめぐっている。22は頸部に螺旋状のヘラ描沈線が施され、下端に板状工具による刺突文がみられるものである。こうした螺旋状のヘラ描沈線と板状工具による刺突文の組み合わせは23・26・28～30など多くみられるが、27のように下端に竹管文が施されたものもある。口縁部は、上下に拡張して内傾する端面に凹線文を施したものが多く、中には26のように肥厚させるだけのものや、29のように大きく上方へ立ち上がるものもみられる。

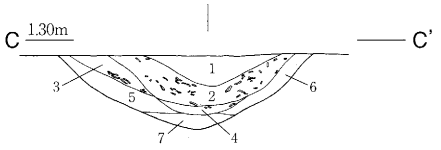
31～46は頸部の短い壺である。口縁部のみの破片で、甕との区別がむずかしいものも含まれている。口縁部は、強く外反して端部を上下に拡張し、内傾する端面に凹線文を施したものが多くみられるが、35・37・41・46など口縁部端面に凹線文を施さないものもある。また40のように口縁端部をわずかに肥厚させるだけのものや、45にみられる直線的に大きく上方へ拡張して外面に凹線文を施しているものもある。47～48は口頸部を失っているもので、玉葱状の胴部をもっている。49も口縁部が欠落しているが、やや長い頸部をもつ小型の壺である。50～55は壺の底部と思われる。





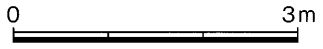
溝１A－A' 土層

1. 暗茶色粘質土
2. 茶灰色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 茶褐灰色粘質土
5. 淡褐灰色粘質土
6. 茶灰色粘質土
7. 灰茶褐色粘質土
8. 淡褐灰色粘質土
9. 淡茶灰色粘質土
10. 淡黄褐灰色粘質土
11. 灰色粘土

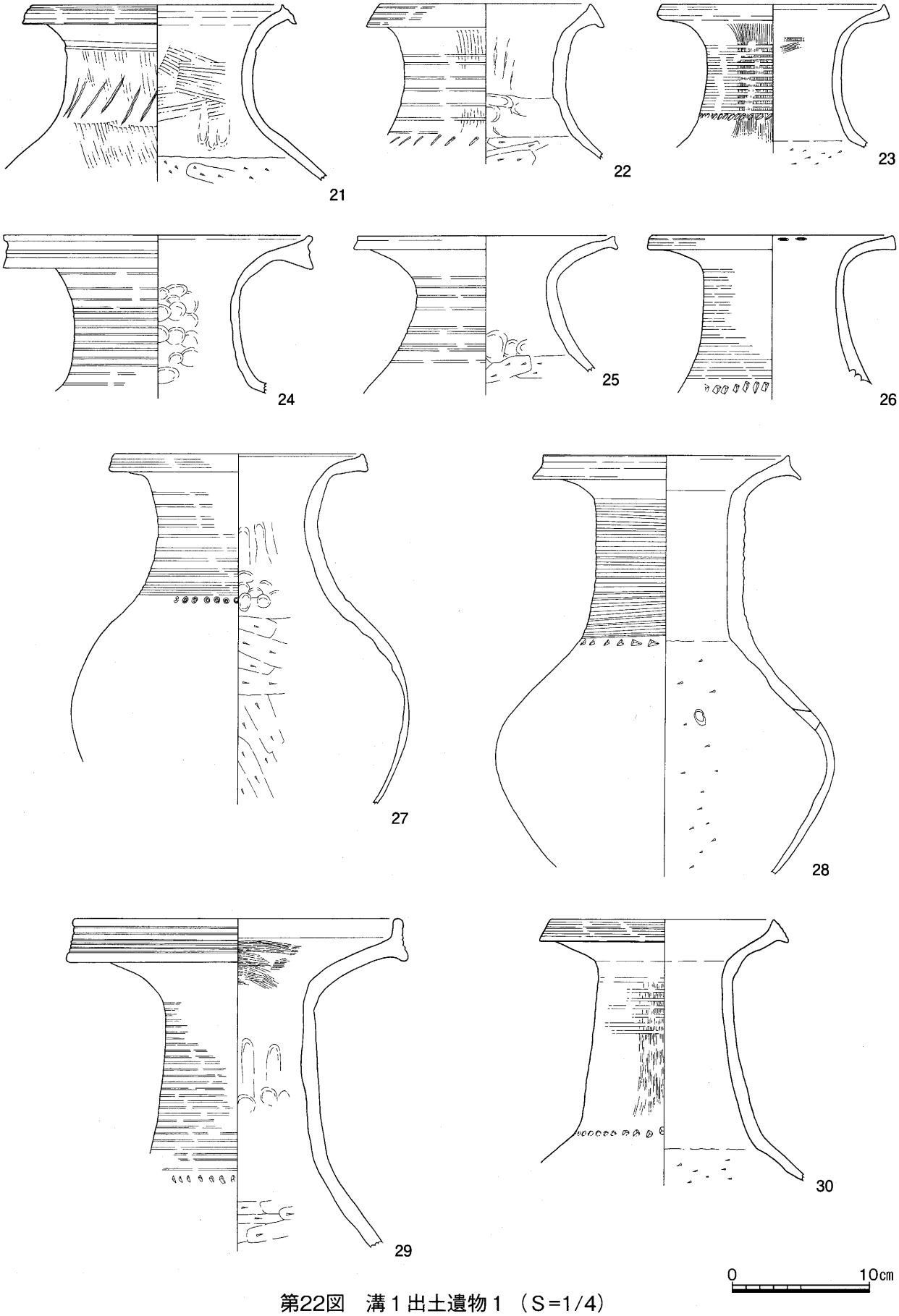


溝１C－C' 土層

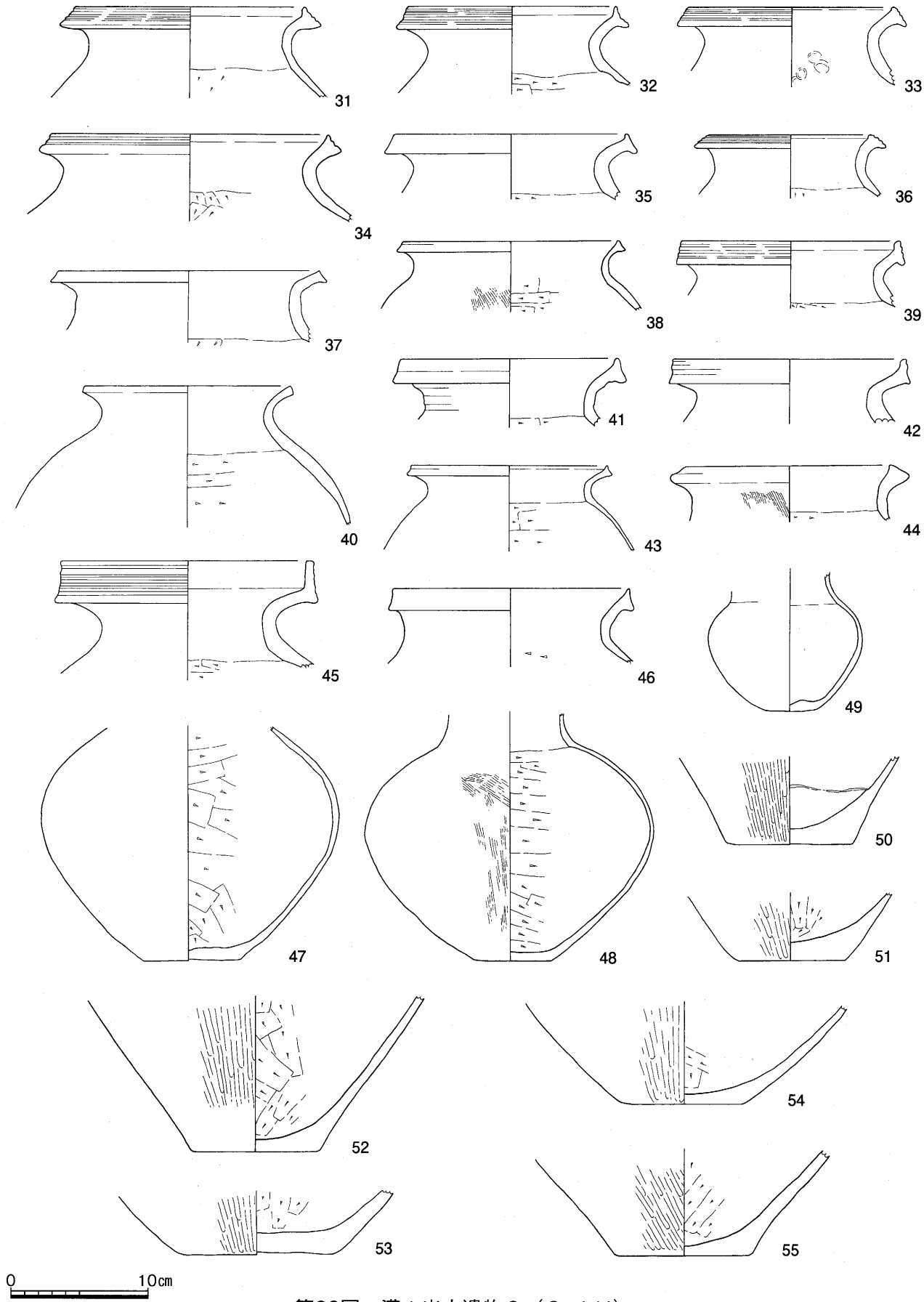
1. 淡茶灰色土
2. 暗茶灰色粘質土
3. 淡茶灰色土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 淡灰褐色土
6. 淡灰褐色土
7. 暗灰色粘土



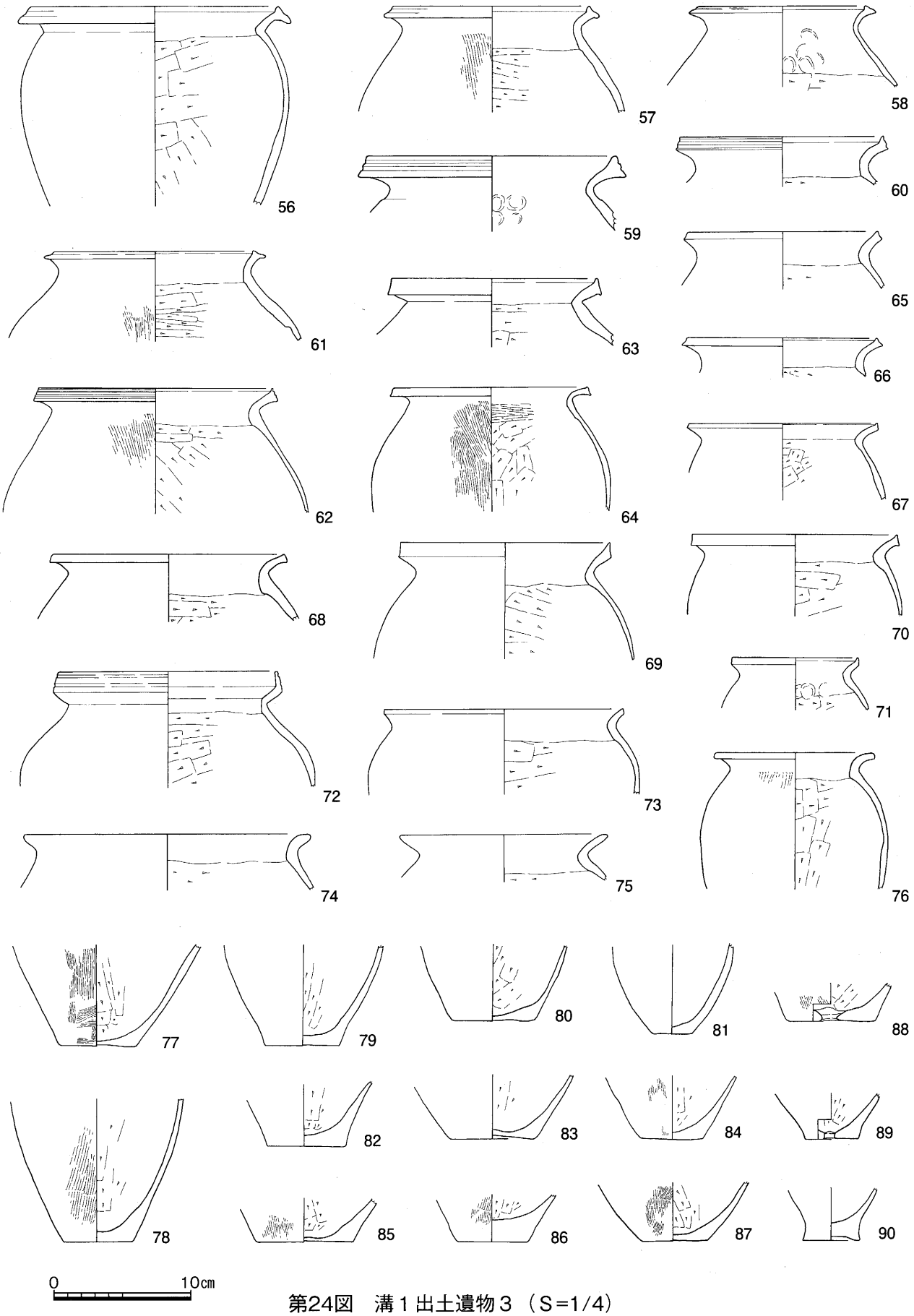
第21図　溝１実測図（S=1/80）



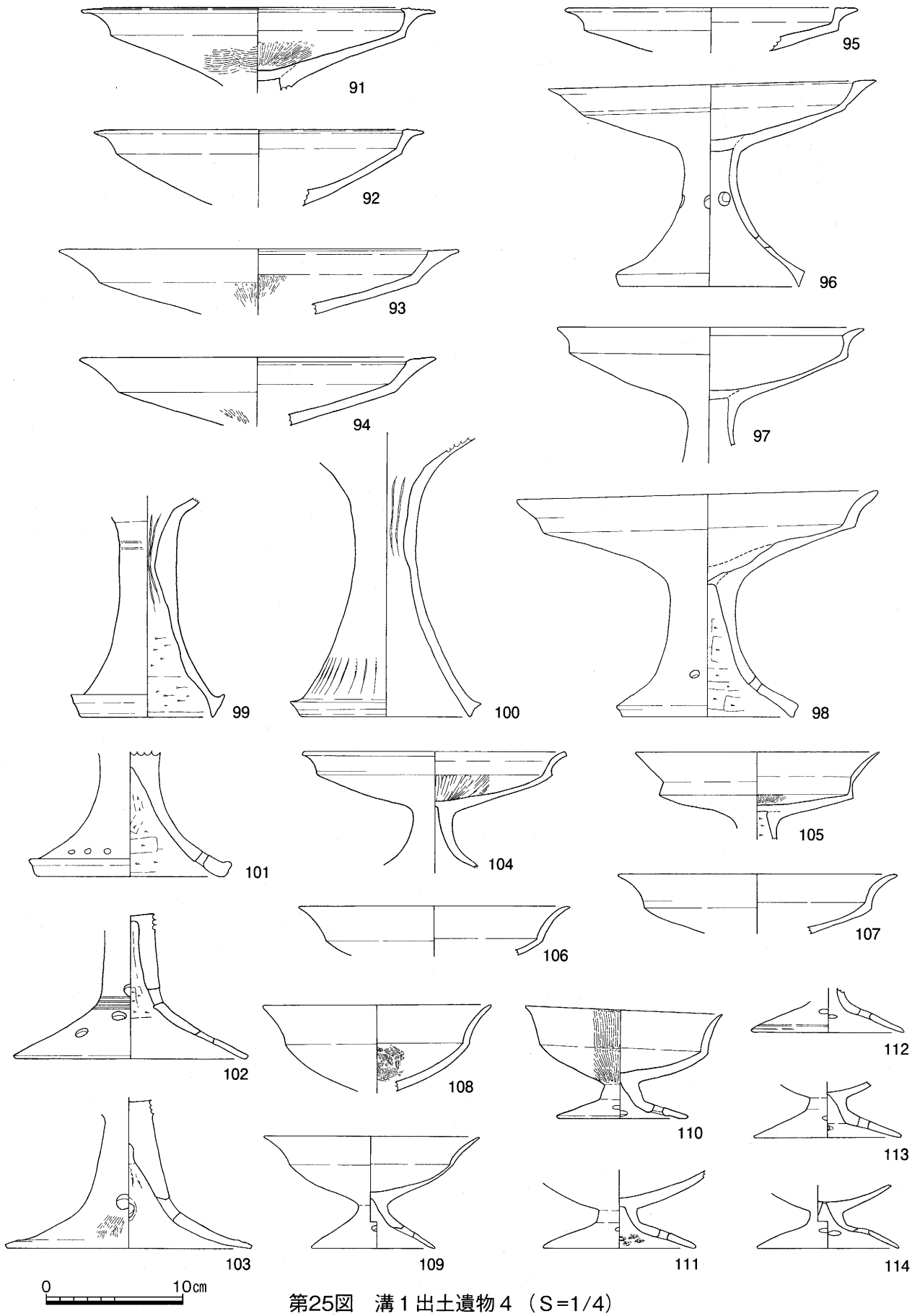
第22図　溝１出土遺物１（S=1/4）



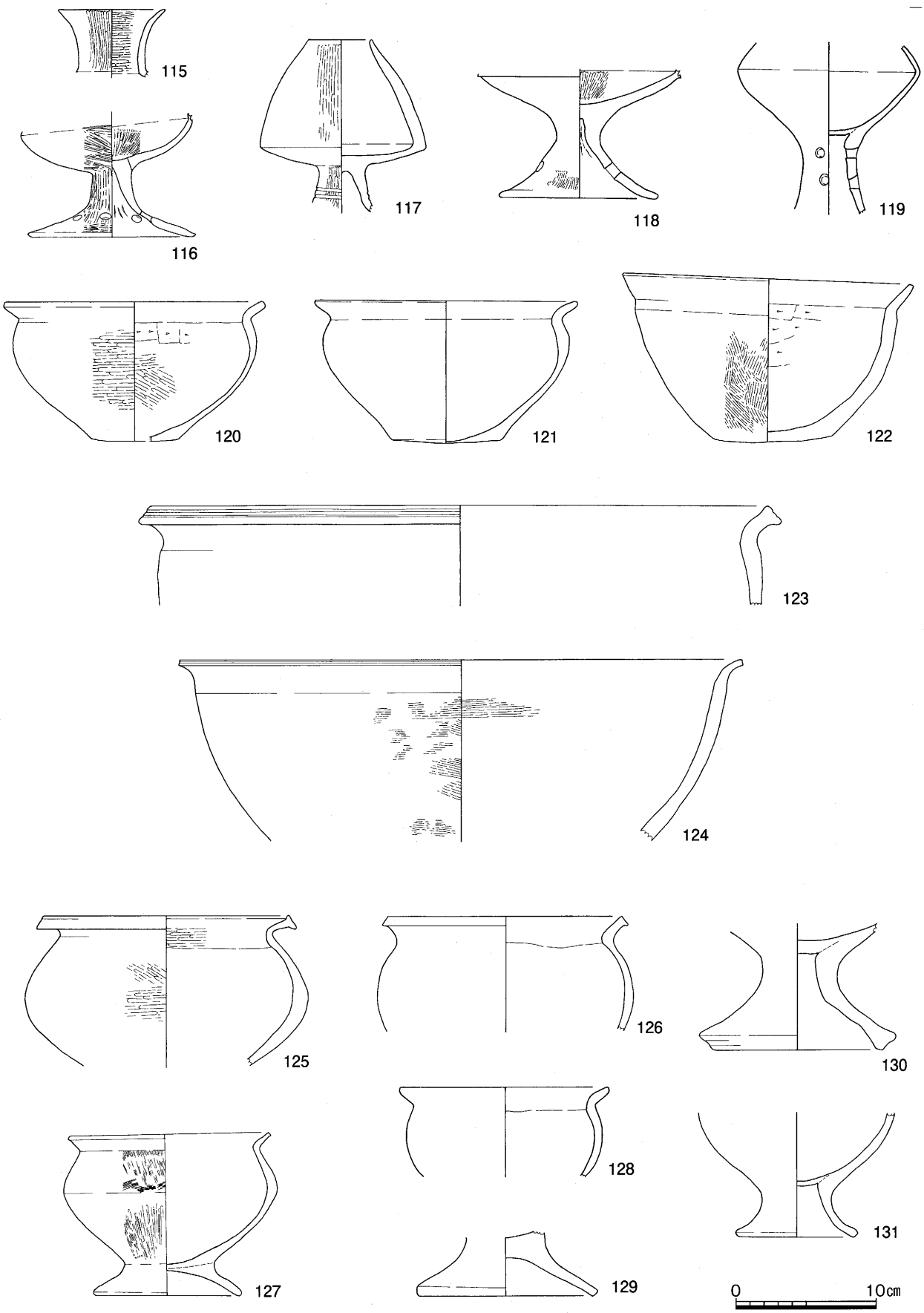
第23図　溝１出土遺物２（S=1/4）



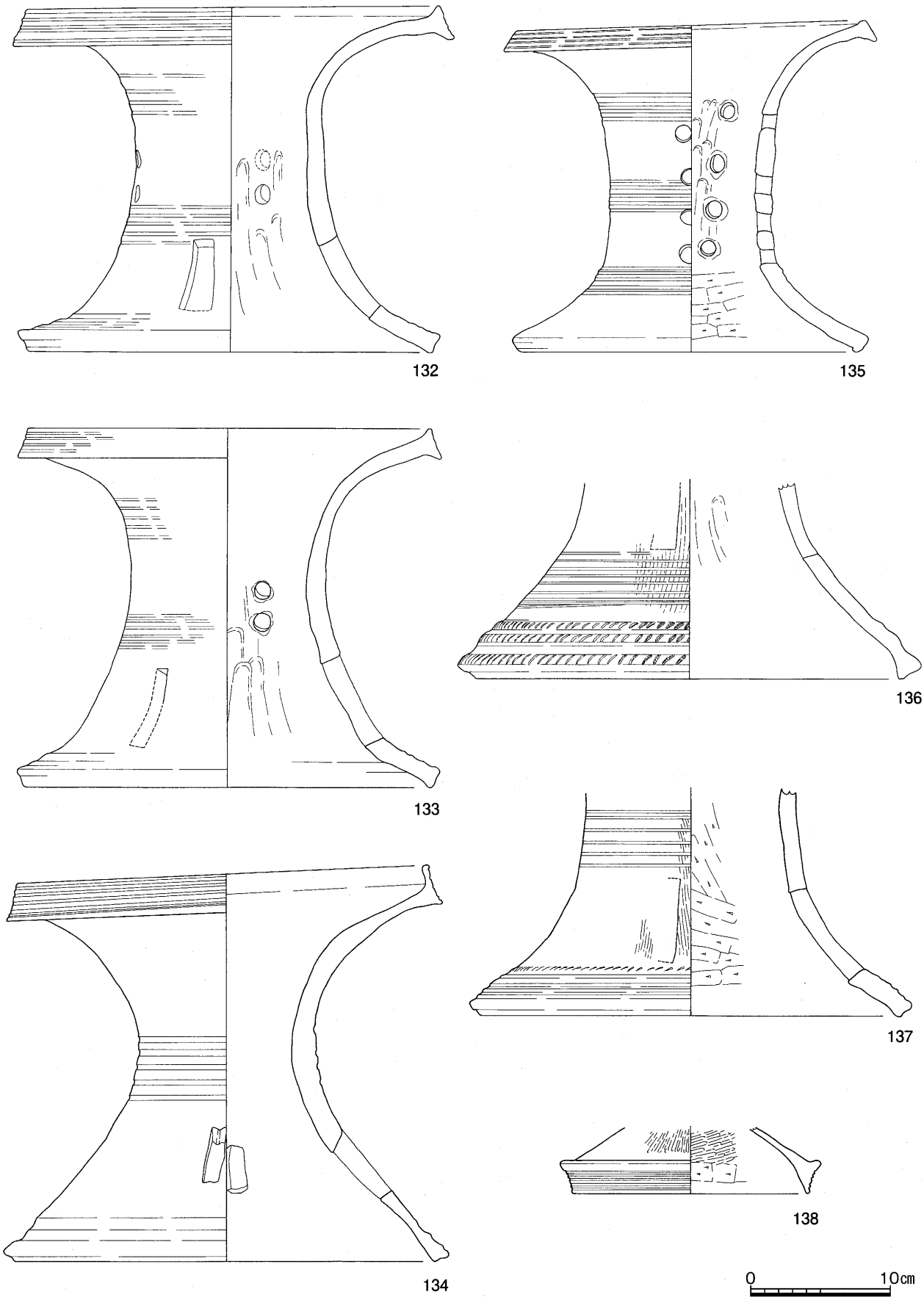
第24図　溝１出土遺物３（S=1/4）



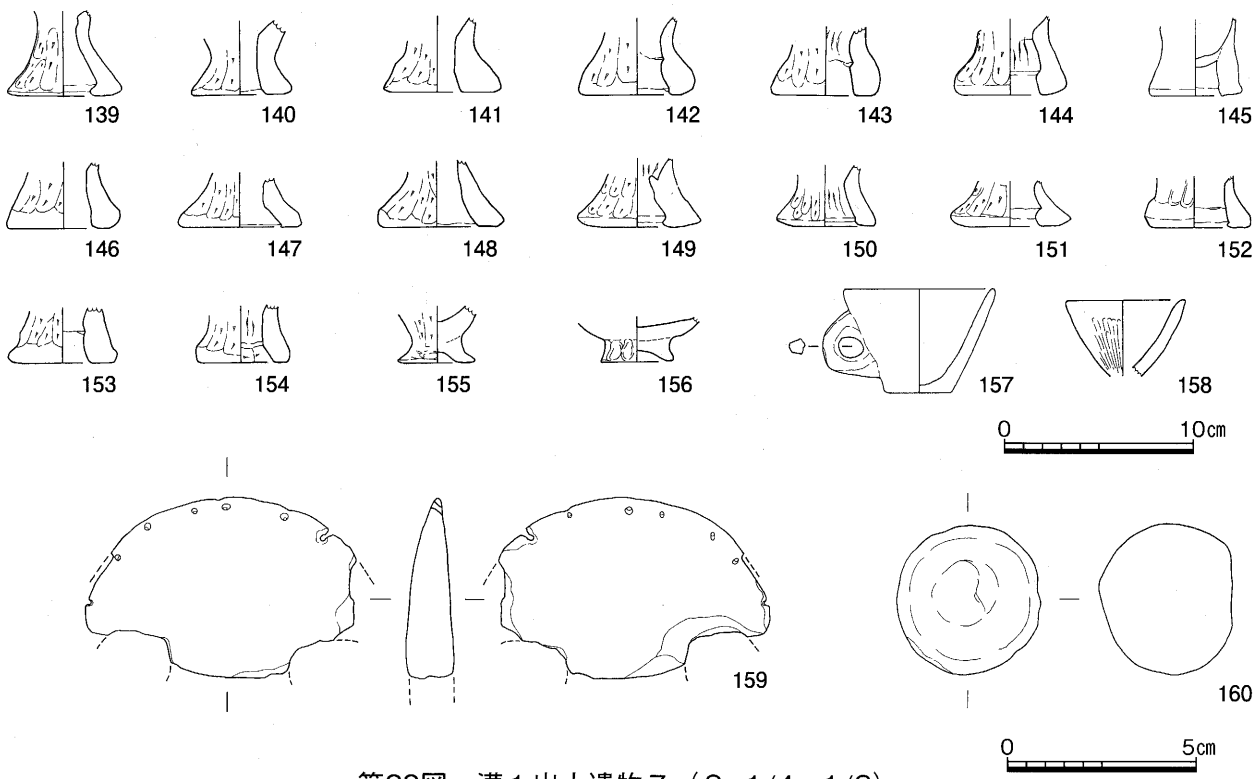
第25図　溝１出土遺物４（S=1/4）



第26図　溝１出土遺物５（S=1/4）



第27図　溝１出土遺物６（S=1/4）



第28図　溝１出土遺物７（S=1/4・1/2）

外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリが施されている。

56～90は甕である。56～62は口縁端部を上下に拡張して端面に凹線を施すものである。64～68は口縁端部をわずかに肥厚させて面をもたせているもので、69～71などは上方につまみあげるようにしてやや幅広の端面をつくっているが、凹線は施していない。72は口縁端部を上方に拡張して複合口縁を呈するものである。73～76は胴部から「く」の字状に屈曲して開き、口縁端部を丸くおさめている。77～90は底部の破片である。平底のものがほとんどであるが、中に83や90のように上げ底ぎみのものも含まれている。88と89は底部中央に焼成後の穿孔がみられるものである。これらの甕は、全体に器表面が磨滅して荒れており、調整のはっきりしないものも多いが、体部外面には縦方向のハケメ、内面は上位が横方向のヘラケズリ、下位は縦方向のヘラケズリを施しているものが多くみられる。

91～114は高杯である。91は杯部から稜をもって上方に立ち上がり、端部は内外方向に拡張するもので、杯部外面には弧状にヘラミガキが施されている。92～97は稜をもって外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は外側へ大きく拡張するものである。これらの口縁部の平坦面には2～6条の浅い凹線文をめぐらしている。98は杯部から外反して斜め上方に立ち上がり、端部は素縁で丸くおさめている。99・100は脚部の破片で、細く長い脚部で、端部は上下に拡張して端面をもち、凹線文を施している。これらの脚部を含め、91～100の高杯は円盤充填法により成形されているものである。101～103も脚部であるが、杯部と脚部を別につくって接合している。101は脚端部を肥厚させて面をもっているが、102・103は細い筒部から広がるもので、端部にはわずかな面をもっている。104～107はわずかに内湾する杯部から外反してのびる口縁をもち、端部は丸くおさめるものと薄く仕上げるものがある。108～110は口径に比べてやや深い杯部をもつもので、口縁部は外反して

長くのび、端部は薄く仕上げている。111 ～ 114は同様な杯部をもつと思われる高杯の脚部で、短脚で屈曲部をもち、四方に円形の透かしを穿っているものである。

115 ～ 119は脚付の壺である。115は口縁部の破片で、細い頸部から外反してのび、端部は薄く丸くおさめている。116は115と同器種の脚部と思われ、扁平な体部に高杯と同様の脚部をもっており、全体にていねいなヘラミガキが施されている。117は口縁部に向かって逆「ハ」の字型にすぼまり、端部はわずかに外反して薄く仕上げている。脚部には2条の凹線がめぐらされている。118も117と同器種の脚部と思われる。119は体部から脚筒部のみの破片であるが、算盤形の体部に長い脚部をもっており、接合方法は円盤充填によっている。

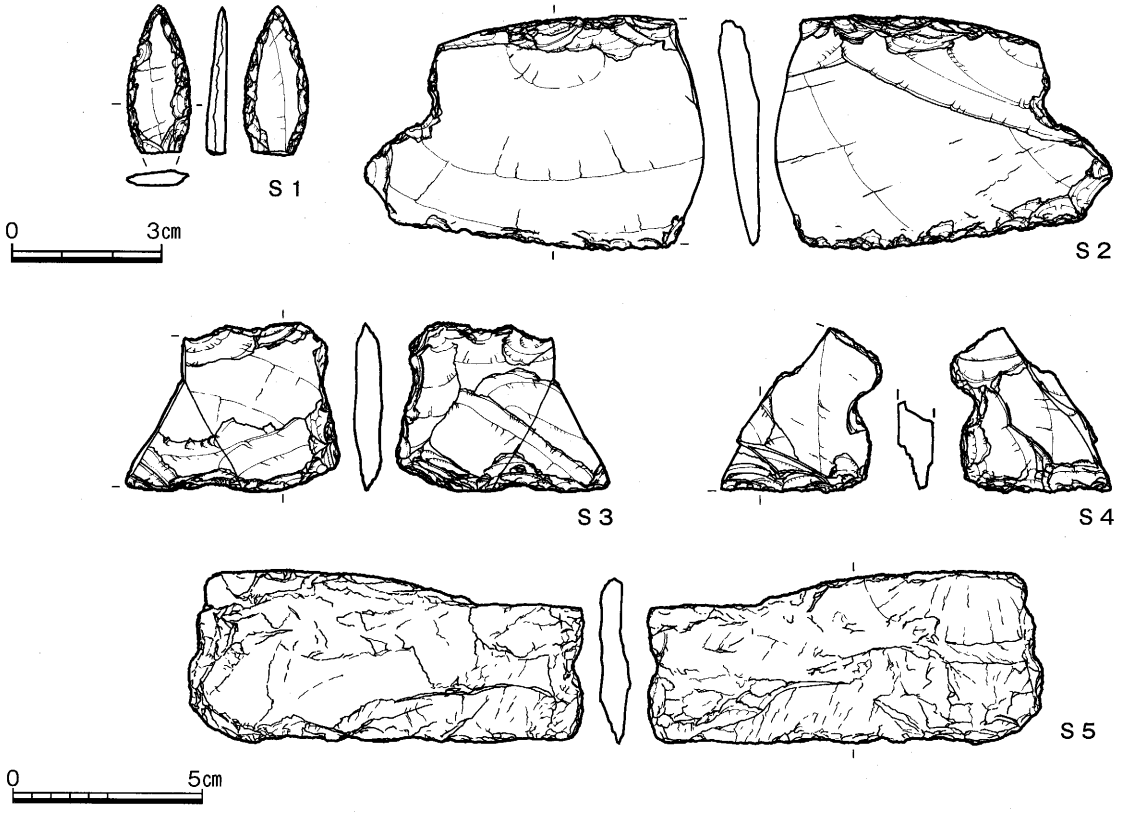
120 ～ 122は鉢である。120・121は肩の張った体部から「く」の字状に屈曲して短い口縁部をもつもので、端部は丸くおさめている。120の外面および内面の下半はていねいなヘラミガキが施されている。122はゆるやかに屈曲する口縁部をもつもので、体部外面にはハケメにより調整されている。123･124は大形の鉢である。123は口縁端部を肥厚させて面をつくり、凹線をめぐらせている。124はゆるやかに屈曲する口縁部を肥厚させることなく、薄い面をもたせており、1条のみ凹線をめぐらせている。体部外面と内面上部にはハケメを施している。

125 ～ 132は台付の鉢である。125・126は口縁端部を拡張して面をもつもので、127・128は端部を丸くおさめている。129 ～ 131は台部で、130・131は円盤充填によって接合されている。

132 ～ 138は器台である。132と133は非常によく似た形態をもつもので、筒部より大きく外反して口縁部に至り、端部は内傾して上下に拡張する。端面には4条の凹線文をめぐらせている。脚部は外反して広がり、端部はわずかに肥厚させて面をもっており、脚裾部には2 ～ 3条の退化した凹線文が施されている。透かしは筒部の中ほどに上下2個1組の円形の透かしを3方にあけ、下方には長方形の透かしを1段3方にもっている。筒部の上方と中央部に4 ～ 6条の凹線文をめぐらせ、脚部内面下半には指頭による強いナデの痕が残っている。134は口縁端部を上方に大きく拡張し、端面に凹線を施すもので、脚部は直線的に広がっている。胴部には5条の凹線をめぐらせ、裾部にも退化した凹線がみられる。脚部には長方形の透かしを4方向にあけている。135は筒部に3段に分けて4 ～ 5本の凹線をめぐらせており、1列が4個からなる円孔を4方向に配している。136・137は脚部の破片である。136の裾部には太い突帯が3条めぐっており、それぞれに板状の工具による刻み目が施されている。137は裾部に4条の凹線をめぐらせ、その上面にヘラ先による刺突文を施している。138は小型の器台の脚部で、内湾ぎみに広がり、端部は上下に拡張して、端面には6条の細い凹線がめぐっている。

139 ～ 156は製塩土器である。139 ～ 154はラッパ状に広がる脚部で、接地面はいずれも水平な面をもっている。体部の底は円板充填により成形され、外面には荒いヘラケズリが施されている。155と156は台をあとから貼り付けたもので、156の底面は椀形を呈しているものである。

157は小型のカップ形の土器である。小さな底部から斜めにまっすぐのび、端部は丸くおさめている。体部のやや下方に環状の取手がつけられており、コーヒーカップのような形をしている。158はミニチュアの土器で、鉢形をしており、外面には細かなヘラミガキが施されている。159は分銅形土製品の破片である。全体に指頭によるナデが施されており、端面は次第に薄くなっている。縁辺には



第29図　溝１出土遺物８（S=2/3・1/2）

貫通する小さな穴があけられている。160は粘土を丸くまるめたもので、投弾と思われる。直径は約4cmあり、ナデによって仕上げている。

石器類としては、サヌカイト製石器・剥片が総数15点出土しており、その総重量264.0gである。また、粘板岩製の石包丁１点も出土している。Ｓ１はサヌカイト製の石鏃である。有茎鏃であるが、茎部を欠損している。Ｓ２～Ｓ４はサヌカイト製打製石包丁である。いずれも欠損品であるが、Ｓ２は使用によって刃部が明瞭に摩耗している。Ｓ５は粘板岩製の石包丁である。両短辺に浅いながらも紐を掛けるための抉りを作りだしている。

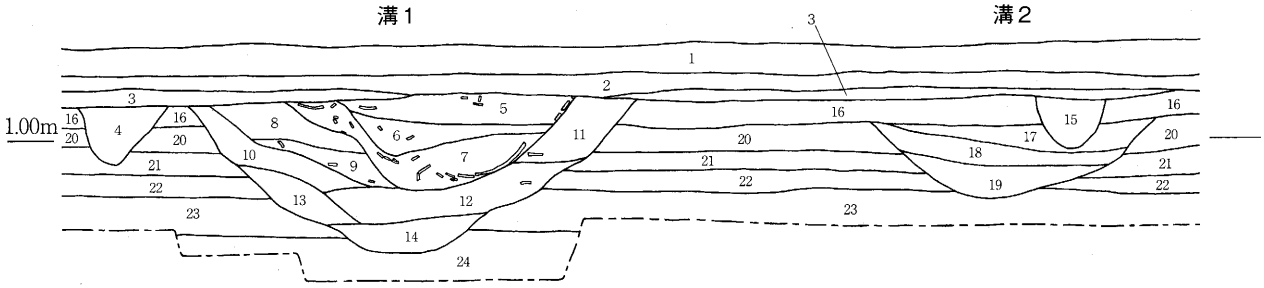
溝２

溝１から東へ１ｍほど離れた位置に、溝１とほぼ平行して南北方向に走っており、北辺の調査区の東側においても同様に溝１と平行して検出されている。壁断面で見ると溝の幅は1.5ｍ、深さは40cmある。溝１の検出面から厚さ15cmほどの淡茶褐色粘質土を取り除いた面で検出されており、壁面の土層からみても溝１より古い溝であるが、埋土中からは遺物は検出されていない。

溝３

調査区北辺の東寄りで、溝１から西へ4.5ｍほど離れた地点に南北方向に検出されている。調査区の関係から長さ２ｍ分ほどしか検出できていないが、幅は1.65ｍ～1.9ｍ、深さは76cmを測る。壁面の土層からみると、溝１よりひとつ下層の茶灰色土層から切り込まれており、溝１より古いことがわかる。埋土中には焼土や炭片が含まれており、遺物としては弥生土器片のほか底面に近い暗灰色粘質土中から獣骨片やシカの下顎骨と思われる獣歯片も検出されている。

弥生土器には壺、甕、高杯片などがみられる。161・162は壺で、口縁部はわずかに屈曲してひらき、

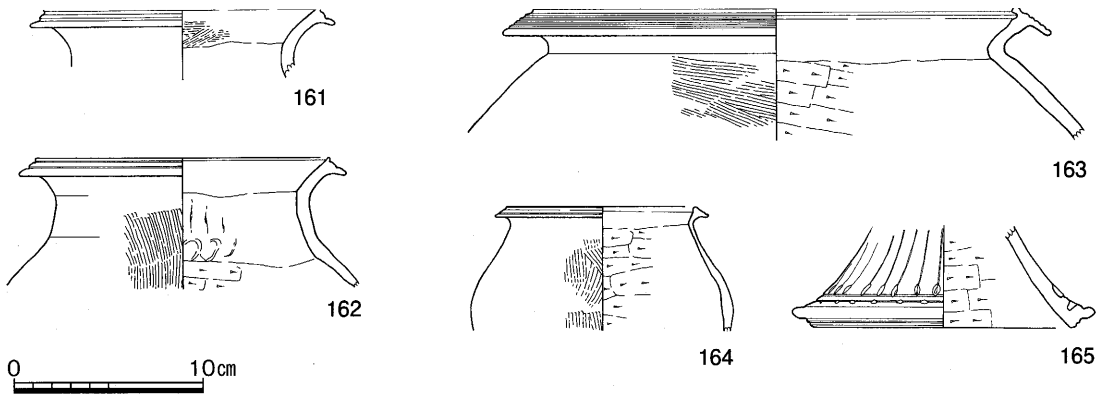


《土層註記》

1. 耕作土	7. 暗灰褐色硬質土	13. 淡黄茶灰色硬質土	19. 青灰色粘質土
2. 淡灰褐色粘質土	8. 淡灰褐色土	14. 暗灰色粘質土	20. 褐灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土	9. 灰褐色硬質土	15. 暗茶灰色土	21. 灰茶褐色粘質土
4. 淡茶褐色土	10. 淡茶褐色硬質土	16. 淡茶褐色粘質土	22. 淡灰褐色粘質土
5. 淡茶褐色硬質土	11. 茶灰色硬質土	17. 淡茶灰色土	23. 淡黄灰褐色粘土
6. 灰褐色硬質土	12. 暗茶灰色粘質土	18. 暗茶灰色土	24. 灰白色粘土

第30図　溝1・溝2断面図（南東調査区北壁）（S=1/40）

内傾して上下に拡張する端面には2条の凹線文がめぐっている。**162**の外面にはていねいなヘラミガキが施され、内面の頸部には絞り目と指頭圧痕が残り、頸部以下にはヘラケズリがみられる。**163**は大型の甕で、「く」の字に強く屈曲して短く広がる口縁部は、上部より下部の拡張が著しいもので、広い端面には5条の細い凹線が施されている。体部外面にはハケメ、内面は頸部上端までヘラケズリが施されている。**164**は小型の甕で、内傾して拡張された端面には2条の凹線文がめぐる。体部の調整は、外面にハケメ、内面には頸部までヘラケズリが施されている。**165**は高杯の脚部である。端部外面は斜め上方に拡張され、端面には凹線文をめぐらせている。外面下端には小さな円形の刺突文が並び、その上方にはヘラ先による楕円形の刺突文が配され、それぞれに向かってシャープなヘラ描き沈線が引かれている。内面は横方向のヘラケズリが施されている。

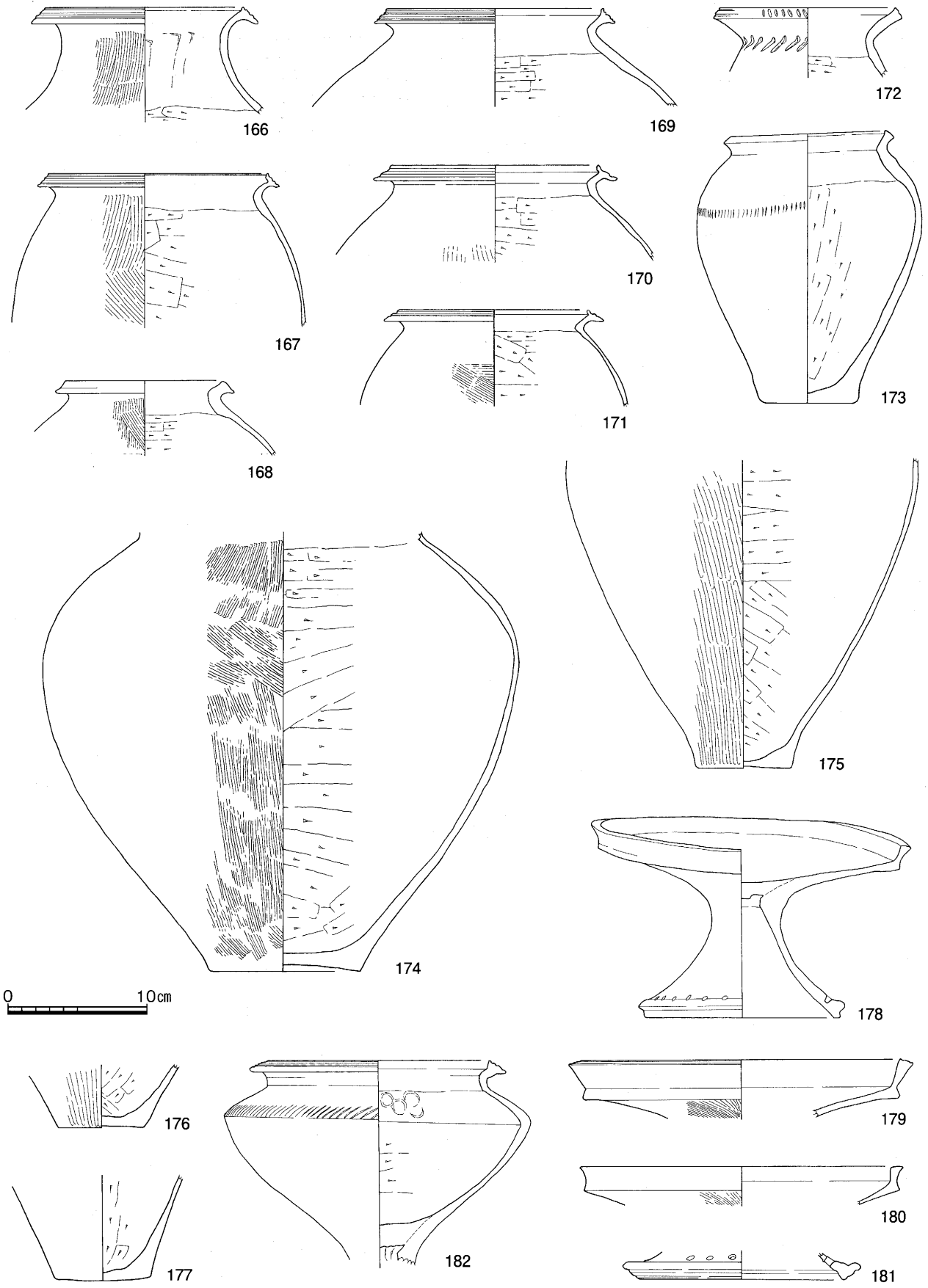


第31図　溝3出土遺物（S=1/4）

溝4

溝3の西方約3.5m、北辺の地下タンク部分にあたる調査区で検出されている。南北方向に流れる溝で、奈良時代と思われる溝8によって東半分が切られている。検出された規模は、長さ4.8m、幅2.2m～2.8m、深さは1.05mである。

出土遺物は、底面から20cmほど上の淡灰褐色土から比較的多くの弥生土器片が検出されており、少量の獣骨片もみられた。出土した弥生土器には、壺、甕、高杯、台付鉢などがみられる。**166**は壺

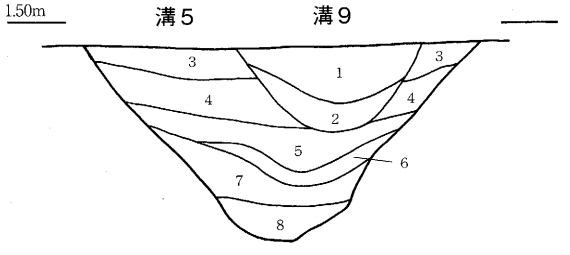


第32図　溝４出土遺物（S=1/4）

である。頸部から外反しながらのび、口縁端部は内傾して上下に拡張し、端面には凹線文をめぐらせている。頸部外面にはハケメ、内面には板状工具による強いナデが施されている。167～177は甕である。167・169～171は口縁端部を内傾させて大きく上下に拡張するもので、広い端面には凹線文を施している。172は口縁端部を上方にわずかに肥厚させ、端面には部分的に刻み目を施しており、頸部には板状工具による刺突文をめぐらせている。173は短い口縁の端部をわずかに肥厚させて面をつくっており、肩部にはヘラ先による細い刺突文を帯状にめぐらせている。174は肩の張った体部をもつもので、外面にはハケメ、内面は頸部までヘラケズリを施している。175は外面にていねいなヘラミガキ、内面にはヘラケズリを施している。178～181は高杯である。178は杯部が著しく歪んでいるが、完形に復元できたものである。外反気味に広がる杯部から強く屈曲して立ち上がり、端部を肥厚させて面をもっている。脚部は「ハ」の字形に広がり、端部は上方に丸みをもって拡張させて、端面には段を有している。裾部には円形の刺突文をめぐらせている。179・180も178と同様の口縁部をもつもので、179の端面には凹線文を施している。181の裾部にも同様の円形の刺突文がめぐるが、貫通しているものもある。182は台付鉢で、強く肩の張った体部から屈曲して短く開く口縁部をもち、端部は内傾して上下に拡張させ、端面には4条の凹線文がめぐっている。肩部にはヘラ先による細長い刺突文を施している。脚部との接合は円盤充填によっている。

溝5

調査区南西部で検出された東西方向に走る溝である。調査区の関係から長さ2m分が検出されているが、南側を古代末の溝9によって切られている。溝の幅は1.7m～1.9m、検出面からの深さは1.05mあり、断面は丸みをもった「V」字形を呈している。溝内の埋土からは弥生時代後期の土器片がビニール袋1袋分ほど出土しているが、いずれも小片であり図化できるものはなかった。



《土層註記》

1. 暗灰褐色土（溝9）
2. 暗褐色土（溝9）
3. 明灰茶色土
4. 灰黄褐色土
5. 灰褐色土
6. 黄土色土
7. 灰黄色土
8. 青灰色粘質土

第33図　溝5・溝9断面図（S=1/40）

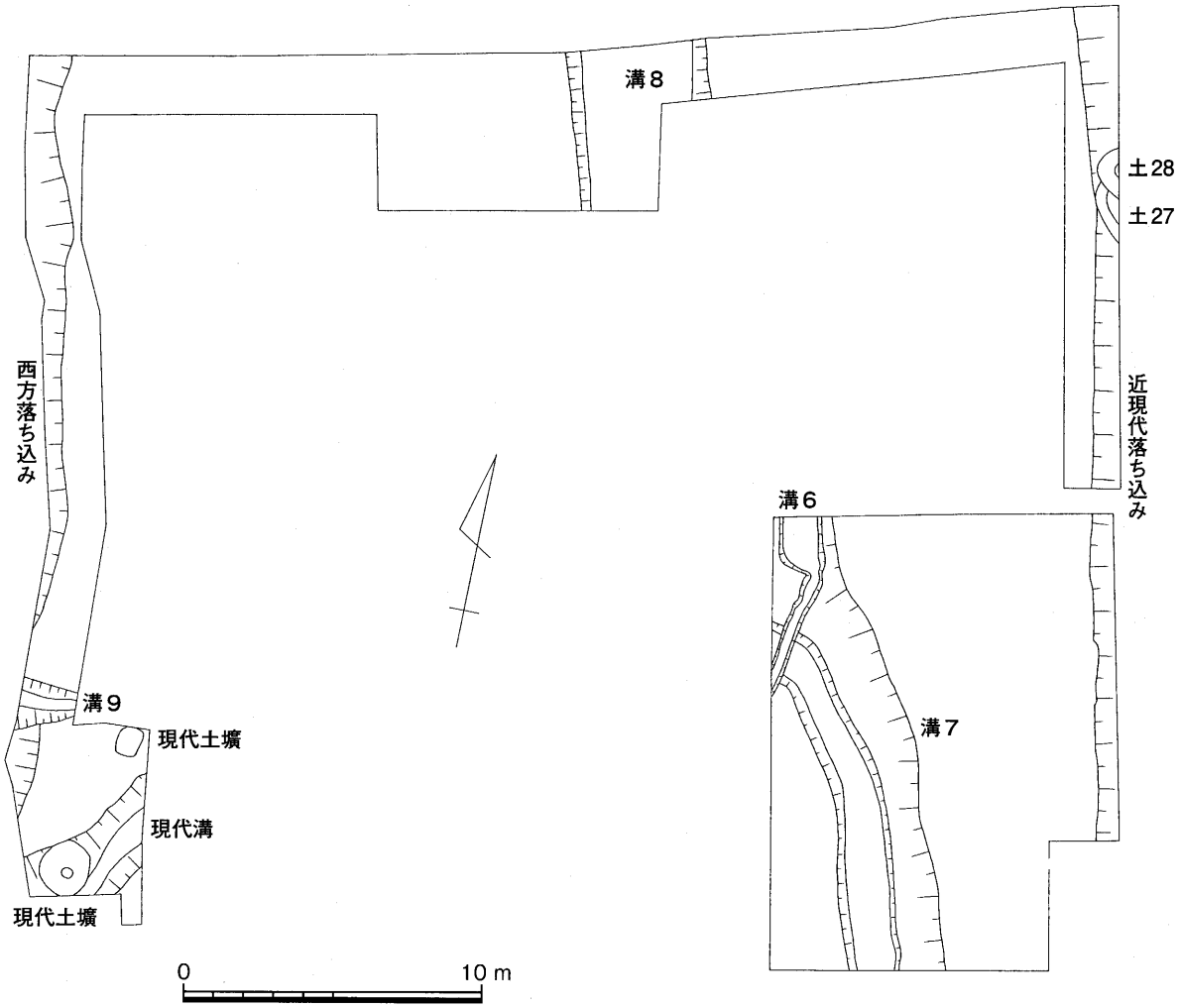
2. 古代・中世の遺構と遺物

弥生時代以降の遺構としては、古代と思われる溝4条・中世の土壙2基・落ち込みなどがあるが、弥生時代の遺構群と比べるとまばらに存在しており、遺物の量も非常に少なくなっている。2基の土壙はいずれも調査区の北東部で検出されており、溝は南北方向に走るものが3条と東西方向のものが1条みられた。これらの遺構には、弥生土器に混ざって古代の土師器や須恵器などが少量ながら検出されており、時期を決める上での手がかりとなっている。

（1）土壙

土壙27

調査区の北東部で東壁にかかって部分的に検出されているもので、東に向かう落ち込みによって上



第34図　古代・中世遺構配置図（S=1/250）

部は削られている。北側を土壙28によって切られているが、長径が3mほどにもなる楕円形を呈する大形の土壙であると思われる。埋土中からは、弥生時代後期の土器片に混じって、備前焼甕片や土師質椀片など少量の中世土器が検出されている。

土壙28

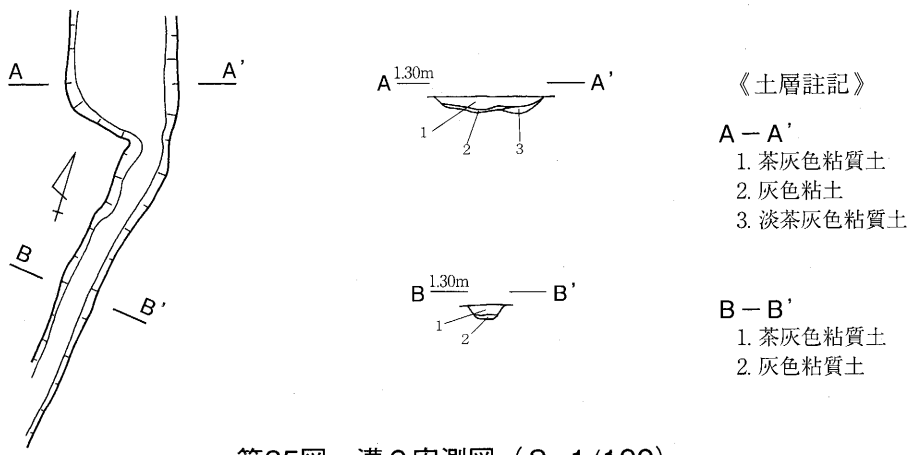
土壙27を切ってつくられており、同様に上部は落ち込みによって削平されている。壁際に半分ほどが検出されているが、2m前後の楕円形の土壙であると思われる。埋土中からは、備前焼甕片や土師質椀片など少量の中世土器片が検出されている。

（2）溝

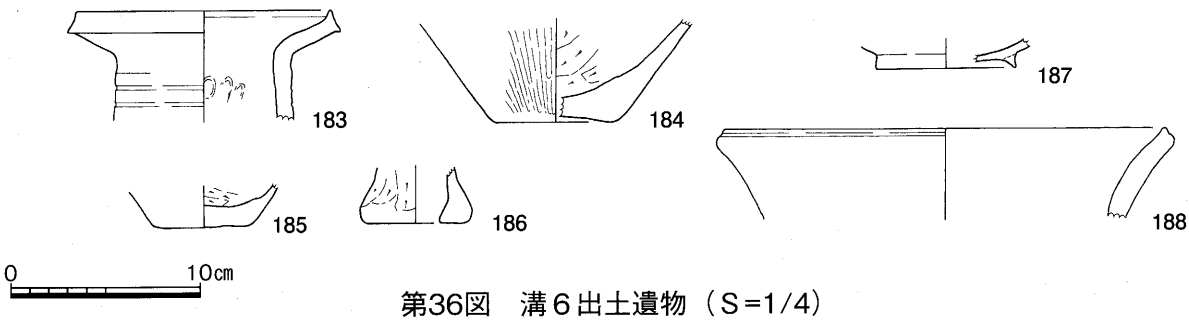
溝6

南東部の調査区の北西隅で検出されている溝で、幅1.5mほどの溜まり状の広い部分から幅約50cmの溝が出ている。浅い溝状で深さは20cmほどしかない。溜まり状の部分には薄い灰色粘土が堆積しており、その上面には黒灰色の炭化物が薄く膜状に被っていた。溝の中からは少量の弥生土器片とともに土師器椀片や須恵器甕片が検出されている。

183～186は弥生土器である。いずれも磨滅が著しいもので、183は口縁端部が肥厚して面をも



第35図　溝６実測図（S=1/100）



第36図　溝６出土遺物（S=1/4）

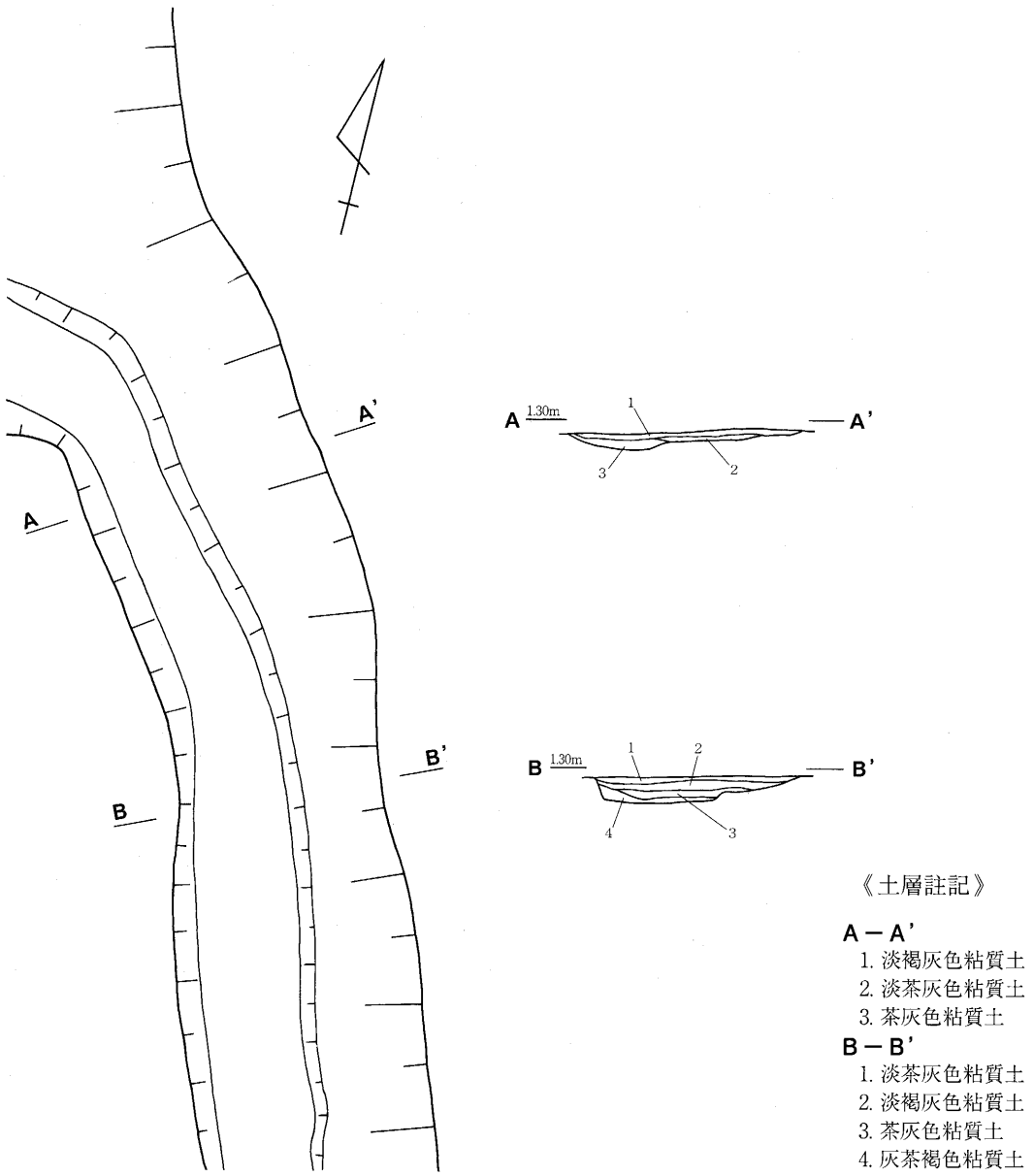
つ長頸壺で、184・185は甕の底部、186はラッパ状に広がる製塩土器の脚部である。187は内面黒色の土師質椀である。貼り付け高台をもつ底部の小片で、内面には炭素が吸着して黒色を呈している。188は須恵器甕の口縁部で、端部は上方に摘み上げて端面に段を有している。

溝７

南東部の調査区の西寄りで検出されている。南北方向に流れるが、調査区の北端で西方向に向きをかえて、溝6に切られている。全体に浅い溝であるが、西側は急に落ち、東側の掘りかたは2段になって緩やかに下がっている。幅は2.8ｍ～3.3ｍ、深さは22cm～35cmを測る。

出土遺物には、各種の弥生土器や土師器杯、土師質椀などのほか石錘、手斧と思われる鉄製品も検出されている。189は弥生土器の甕で、口縁端部を肥厚させて端面に凹線をめぐらせている。190は土師器の甕で、屈曲して上方へのびる二重口縁を有している。194は器台の口縁部で、内傾し上下に拡張する口縁部に凹線文をめぐらせている。195～198は製塩土器の台部である。199は高台をもつ土師器の杯身である。底面から屈曲して斜め上方にまっすぐにのび、口縁端部は丸くおさめている。高台は底部の外周に沿って貼り付けられたもので、短く外に張り出している。体部内面にはハケメが施され、内外面ともに明赤褐色の顔料が塗布されている。200～202は無台の土師器杯で、平らな底から外反気味に斜め上方へのび、端部は丸くおさめているものである。これらの杯にも内外面に赤色顔料を塗布した痕跡がみられる。203・204は土師質の椀である。いずれも貼付高台を有するものであるが、203の高台は剥落している。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。204の内面は全体が黒色を呈しているが、203の内面は部分的に黒味を帯びている程度である。

Ｓ６は花崗岩製石錘である。重量は336.5gで、長さ7.8cmの長軸部分に敲打によって溝を刻み、紐



第37図　溝７実測図（S=1/100）

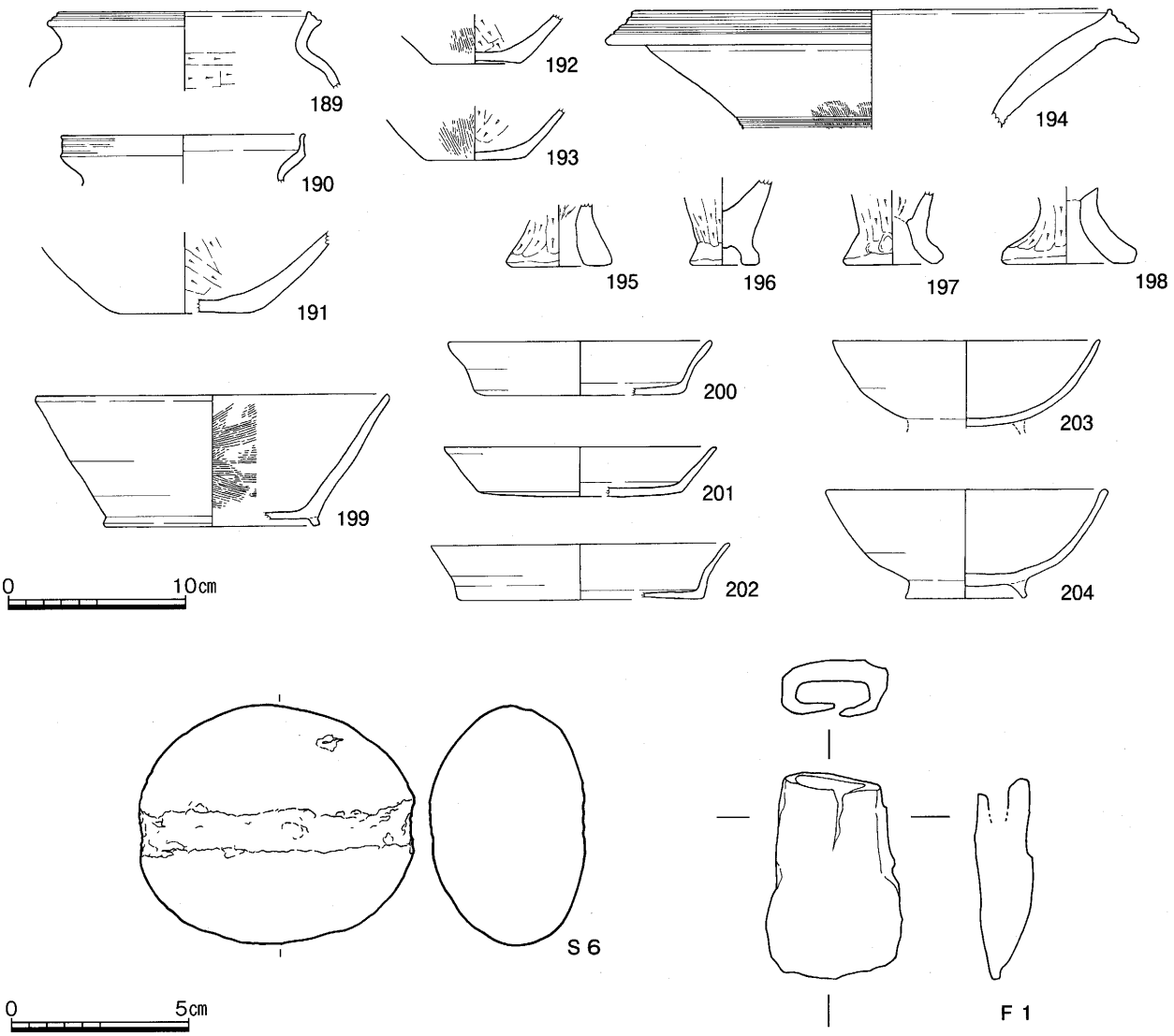
をかけるようにしている。また、表面も研磨されて平滑になっている。

Ｆ１は鉄製品で、手斧と思われる。溝の上面から出土したもので、全長5.9cmを測る。身部は先端に向かって薄くなり、先端には刃がつけられている。刃部の幅は3.6cmある。袋部は中空につくられており、断面は幅2.1cm、厚さ0.7cmの長方形を呈しているが、錆のため奥行きは不明である。

溝８

調査区北辺の中央付近で検出されている。南北に走るやや幅の広い溝で、同じく南北に走る弥生時代の溝４の東肩を切ってつくられている。調査区の関係から部分的に長さ5.4ｍほどが検出されているのみであるが、幅は約4.6ｍ、深さは30cm～50cmで、西側の方が若干深くなっている。

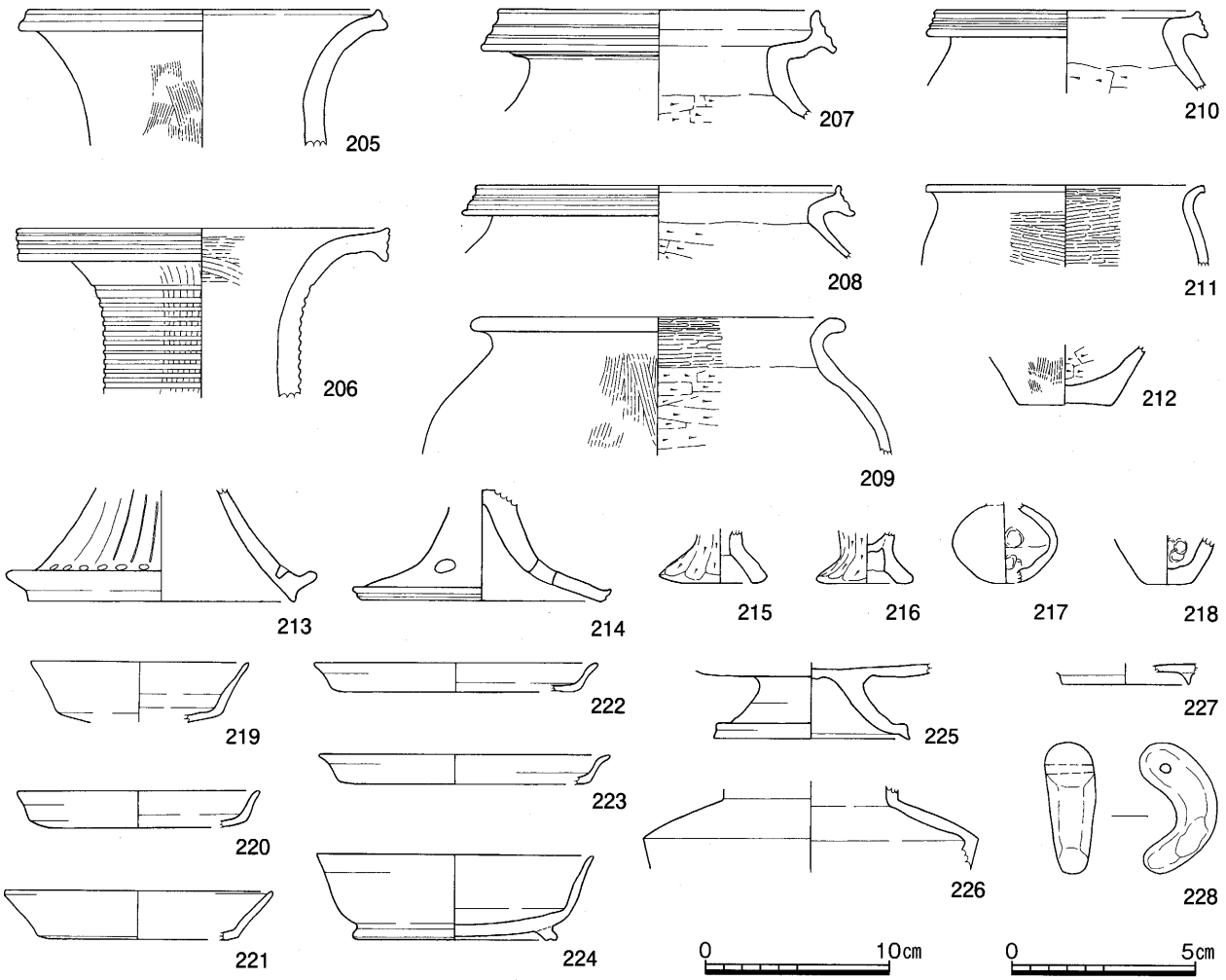
出土遺物は、おもに溝の底から検出されており、各種の弥生土器類や勾玉形土製品・石器母岩などとともに土師器杯・皿、須恵器杯・高杯・壺、内面黒色の土師質椀などが検出されている。205・



第38図　溝７出土遺物（S=1/4・1/2）

206は弥生土器の長頸壺である。206は外反してのびる口縁の端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施すもので、頸部には沈線文をめぐらせている。207は頸の短い壺である。屈曲して開く口縁部をもち、端部は内傾して上下に大きく拡張して、端面には凹線文をめぐらせている。208～212は甕である。208・210は端部を拡張して凹線文を施すもので、209・211は短く屈曲する口縁部をもっている。209は端部を肥厚させて丸くおさめている。213・214は高杯の脚部である。213は端部を大きく斜め上方に拡張するもので、裾部に刺突文をもち、それに向かってシャープなヘラ描き沈線が引かれている。

215・216は製塩土器の台部で、217・218はミニチュアの壺である。219～221は土師器杯である。無台のもので、底部から外反気味に斜め上方へのび、端部は丸くおさめているものである。内外面には赤色顔料を塗布した痕跡がみられる。222・223は土師器皿である。口縁部はやや肥厚して外反気味に短く立ち上がり、端部は丸くおさめている。これらにも赤色顔料を塗布した痕跡がみられる。224は須恵器の杯で高台をもっている。やや丸みをもった底部から外反気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめている。高台は貼付高台で、短く外側に張り出して、端面は凹面をなしている。225



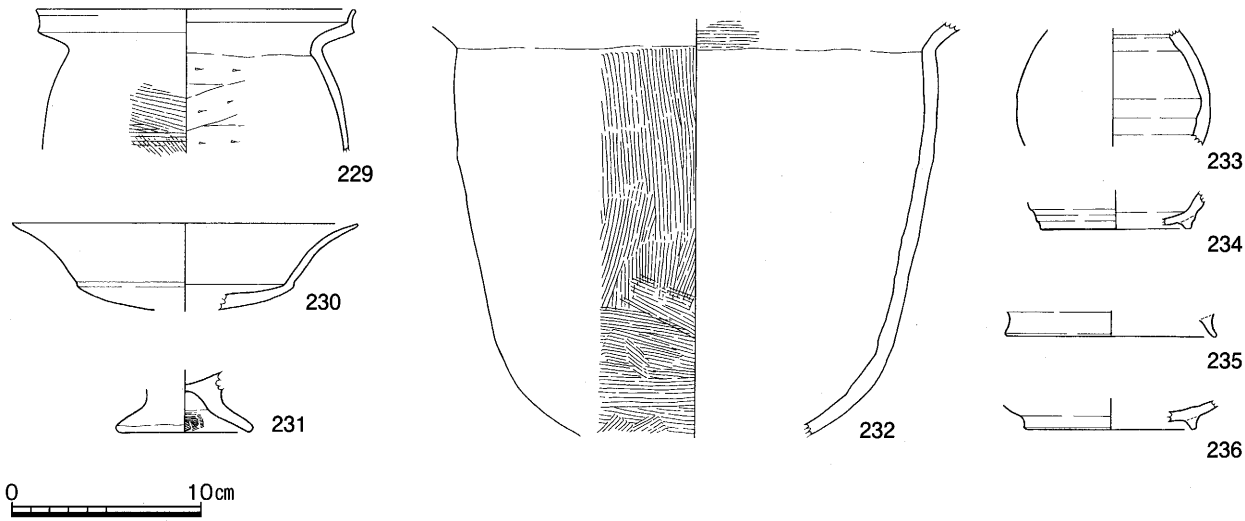
第39図　溝８出土遺物（S=1/4）

は須恵器の高杯の脚部と思われる。杯部との接合部から「ハ」の字状に短く広がり、端部は短く屈曲して外側に面をつくっている。226は須恵器の壺で、稜線をもって屈曲する肩部の破片である。227は内面が黒色を呈する土師質椀で、貼付高台をもつ底部のみの破片である。228は勾玉形の土製品である。長さ3.6cm、厚さ1.4cmのもので、ほぼ完形である。全体に指頭によるナデで仕上げており、とくに文様などはみられない。

溝９

調査区南西部で検出された溝で、東西方向に走る。弥生時代の溝5を切り込んでつくられている。検出された範囲での溝の幅は1.0ｍ～1.35ｍあり、検出面からの深さは45～55cmである。断面は「Ｕ」字形を呈しており、西側の方が幅が広く、深くなっている。

溝内の埋土からは弥生時代後期の甕や高杯などとともに長胴の土師器甕、須恵器瓶、内面黒色の土師質椀などが出土している。229～231は弥生土器である。229は甕で、口縁端部は上方に引き出され二重口縁となっている。230は高杯で丸みをもった杯底部から外反しながら長くのびる口縁部をもつ。231は台付鉢の台部の破片と思われる。短くのびた脚端部は丸くおさめており、内面にはハケメを施している。232は土師器の長胴甕の破片である。口縁部と底部を欠いているが、体部外面全体と口縁部内面にハケメを施しており、体部内面はていねいなナデで仕上げられている。233・234は



第40図　溝９出土遺物（S=1/4）

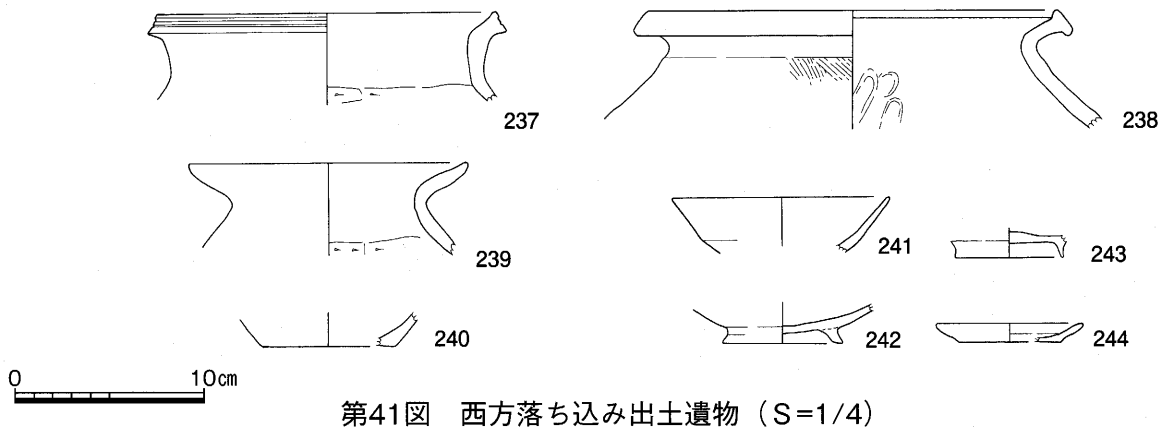
須恵器瓶である。233は下膨れの体部をもっており、234は段をもった低い高台が貼り付けられている。235・236は土師質椀の底部のみ小片で、しっかりとした貼付高台をもっている。

（3）その他の遺構

西方落ち込み

調査区の西端で、南北方向の調査区の辺に沿うように西側に向かって落ち込みが確認されている。この落ち込みは、山陽新幹線及び都市計画道路に伴う発掘調査で確認されている旧河道のうち、亀川と呼ばれる河道の東岸の落ち際にあたる部分ではないかと考えられる。

この落ち込みから出土している遺物には、弥生土器のほかに中世の土師質土器がみられる。237～240は弥生時代後期の土器片である。237は体部から短く立ち上がる頸部をもち、口縁部は外反して上下に拡張しているもので、端面には凹線文をめぐらせている。238～240は甕で、238は口縁端部を上下に拡張しており、239は「く」の字状に屈曲して端部は丸くおさめている。241～243は土師質土器椀である。全体に灰白色を呈し、浅い体部をもつもので低い高台を貼り付けている。244は浅い土師質小皿である。



第41図　西方落ち込み出土遺物（S=1/4）

第4章　まとめ

1　岩倉遺跡について

岩倉遺跡は、岩倉神社周辺を北端とし、山陽新幹線を南に越えたあたりにまで広がっていると考えられている。これまでに岩倉遺跡周辺で発掘調査が行われていないため遺跡の詳しい状況は把握されていないが、昭和13年に発行された『吉備考古』37号には都窪郡庄村字岩倉発見として木葉文の刻まれた弥生土器片の図が掲載されており、これにより岩倉遺跡は弥生時代前期から存在する遺跡として知られるところとなったのである[1]。

今回の調査地点は、岩倉神社からみるとほぼ真南に500ｍあまり離れた地点にあたり、小字は岩倉の南に隣接する才ノ町となっている。今回の調査では、出土遺物をみるかぎり弥生時代前期に遡るような土器片等は全く検出されておらず、弥生時代の遺構遺物はほとんどが弥生時代後期に属するもので、同じ岩倉遺跡の中でも北と南とでは遺跡の時期に大きな隔たりがあることが確認された。

北方の岩倉神社周辺は、かつて総社平野を横切って流れていたとされる高梁川の分流の河口付近にあたり、岩倉神社のある小丘の南側一帯には早くから自然堤防が形成されていたと考えられている。この自然堤防上にいち早く成立した弥生時代前期の集落が、岩倉遺跡のうちの北方に位置する集落跡であると考えてよいであろう。こののちも高梁川によって沖積地はさらに南に向かって次第に広がっていき、弥生時代後期になって今回の調査地点やさらにその西側に広がる上東遺跡といった大きな集落が営まれるようになってくるのである。岩倉遺跡の北と南との時期的な違いは、こうした地形的な変化を端的に示しているものであるということができる。

また、岩倉遺跡の弥生集落が営まれていた微高地の全体的な規模については、現況ではなかなか明確にしえないが、今回の調査区周辺ではいくつかの発掘調査が行われており、微高地の南端付近の状況についてはある程度わかりつつある。

以前に行われた新幹線や都市計画道路の建設に伴う発掘調査では、岩倉遺跡の南部を東西に横断するように発掘調査が行われており、この付近の東西方向についての規模はこれにより知ることができる。調査によると、まず微高地の西側には幅100ｍほどの旧河道亀川が流れていること。そして、この川岸から東に向かって微高地が続いており、幅40ｍあまりにわたって土壙や溝などの遺構が検出されていること。さらにこの微高地は足守川方向に向かって徐々に下がっていくことなどが確認されており[2]、微高地の南付近では、やや西に振りながら東西方向の幅はかなり狭まってきていると推測される。

一方、微高地の南北方向の広がりについては、今回の調査区の南西方向にあたる新幹線側道を基点に、南に向かって主要地方道箕島高松線が建設されており、それに伴い平成9年から10年にかけて実施された発掘調査により見当をつけることができる。この発掘調査では、全国で2例目となる弥生時代の波止場状遺構が発見され注目を浴びたが、新幹線側道からこの波止場状遺構にいたるまでの約500ｍの間は、後背湿地と灰色粘質土系の水平堆積が確認されており、微高地の存在は確認されていないのである[3]。そうすると、この道路が旧河道の亀川に沿った河道内を通っている可能性も斟酌し

なければならないものの、岩倉遺跡の南端はおおむね新幹線あたりまでということになり、今回の調査地点は岩倉遺跡の南端に非常に近い部分であるということになる。

2　遺構について

今回の調査で確認された遺構には、大きく分けて弥生時代後期に属するものと古代から中世にかけてのものとがある。このうち弥生時代後期のものとして、竪穴住居1軒・掘立柱建物1棟・井戸1基・土壙26基・ピット86個・溝5条が検出されている。竪穴住居跡は、調査区南西端で部分的に検出されたもので、深さも床面までの10cmあまりが残存していたに過ぎない。しかしながら、従前の山陽新幹線及び側道部分の旧河道亀川の東側にあたる才ノ町調査区の微高地からは、住居跡や掘立柱建物などの建物は検出されておらず、調査区南東部でみられた掘立柱建物1棟とともに、注目されるものである。

また、土壙およびピットについては北東部を除き、微高地の中央部付近を中心に散在しているが、調査区が限られていることや上面が削平を受けていることなどもあり、時期的なことも含めてその性格ははっきりしていないものが多い。

弥生時代の溝については、溝5を除き微高地の主軸方向と同じ南北方向に流れているものであった。これらの溝の時期については、層位からみると溝2が最も古いものと思われるが、この溝からはほとんど遺物は検出されなかった。そのほかの溝については、上部が地下げ等により削平を受けているため層位的に前後関係を決めることは困難であるが、土器の出土の少なかった溝5を除いて、出土土器から前後関係をみると、溝3では弥生時代中期末まで遡る様相をもつ土器が検出されており、つづいて溝4、溝1という順になる。

今回検出された溝と従前の新幹線及び側道の建設に伴う調査で確認された溝との関係については、溝1が位置や遺物の出土状況、遺物の内容等からみて、才ノ町調査区の溝Bにつながるものと思われる。そのほかの溝についてはあまりはっきりしないが、今回の調査区の溝2が溝Dにつながる可能性もある。いずれにしても、これらの溝は緩やかに東に向かって下がっている才ノ町の微高地の東縁辺を、微高地の主軸方向に沿うように流れており、微高地縁辺での排水の機能をもった溝であると考えてもよいだろう。また、今回の調査区内では溝1・2は南北にほぼ直線的に流れているが、才ノ町調査区の南端では流れがゆるやかに西に曲がってきており、南に向かって次第に細くなってくる微高地の状況を示しているものともとれる。

弥生時代から後の遺構としては、古代と思われる溝4条・中世の土壙2基・落ち込みなどがあるが、弥生時代の遺構群と比べると、まばらに存在しており、遺物の量も非常に少なくなっている。このうち、調査区の西辺で南北方向にみられた西方への落ち込みについては、堆積土中に土師質土器片等が含まれており、中世の遺構と思われた。この西方への落ち込みについては、従前の才ノ町調査区の西端でも確認されており、旧河道の亀川の東岸にあたるものと考えられている。亀川では古墳時代の土器片が大量に出土しており、河道自体は中世頃までは存在していたとされている。そうすると、中世土器を含むこの落ち込みについても、位置関係からも旧河道の亀川の川岸にあたるものと考えてもよいと思われる。

3　遺物について

今回の調査により出土した遺物は、遺物収納コンテナ約70箱分ある。これらのほとんどは弥生土器片が占めており、ほかに弥生時代の石器、古代の土師器、須恵器、手斧と思われる鉄製品、中世土器、獣骨なども検出されているが、その量はわずかである。

今回の調査により検出された弥生土器のうち、もっとも古式を呈するものは、数量は少ないながら溝3から出土している土器である。これらは、壺、甕とも口縁部を内傾させて大きく上下に拡張させており、弥生時代中期末頃まで遡るものであると考えられる。溝4出土の土器は、これに続くと思われる時期のものである。高杯は、杯部から稜をもって立ち上がり、外傾して端部を肥厚させる口縁部をもつもので、後期初頭に位置づけられる。溝1から出土した大量の土器は、いずれも弥生時代後期の中に含まれるものであるが、後期初頭から末までの時期的な幅が認められる。溝1は、南北方向に流れる溝で、幅2.6m～3.0m、深さは72cm～84cmの規模をもつものである。大量の土器は溝の底面ではなく、底から30～40cm上がった中層から検出されており、溝がある程度埋まった時点で大量に廃棄された状況を示していた。またこれらの土器は、理由ははっきりしないが、いずれも磨滅の著しいものがめだって多くあり保存状態が悪いものであった。土器の器種については、長頸壺や壺、甕、高杯などのほかに製塩土器やカップ形土器、分銅形土製品等も含まれていたが、ある器種が特別に多くみられるといった状況ではない。このほか調査区南西部で検出された井戸からは、ほぼ完形の甕3点が出土しており、上東遺跡で鬼川市Ⅱ式とされた土器群に相当するものと思われる。

そのほか、古代の土器は溝6～9で弥生土器とともに少量ずつ出土している。このうち溝7・8からは丹塗りの土師器杯片が、また溝6～9からは内面黒色の土師器椀片が検出されている。

註

(1)　吉備考古学會『吉備考古』第37号1938　巻頭の口絵に「都窪郡庄村字岩倉発見、弥生式土器ノ模様　吉田謙三氏蔵」として、木葉文と思われる文様の刻まれた弥生土器片5点と刺突文と櫛描文のついた土器片1点ずつの図のみが掲載されている。

(2)　岡山県教育委員会『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集1974
岡山県教育委員会『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16　1974

(3)　岡山県教育委員会『下庄遺跡・上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157　2001

出土土器観察（一覧）表

掲載番号	出土位置	種　別	器　種	法量（cm）			焼成	色　調	胎土	特　徴・調　整
				口径	底（脚）径	器高				
1	井戸	弥生土器	甕	15.2	5.4	25.0	良好	にぶい黄色	微砂粒	
2	井戸	弥生土器	甕	13.8	4.9	23.3	良好	にぶい褐色	微砂粒	
3	井戸	弥生土器	甕	12.6	4.0	22.4	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	口縁櫛描き沈線
4	井戸	弥生土器	器台	(12.1)	−	−	良好	にぶい黄褐色	微砂粒	口縁部凹線
5	井戸	弥生土器	器台	−	(30.0)	−	良好	にぶい黄褐色	精良	
6	土壙6	弥生土器	甕	(25.5)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	口縁部凹線
7	土壙6	弥生土器	甕	(26.3)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	口縁部凹線
8	土壙6	弥生土器	甕	−	(11.1)	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
9	土壙6	弥生土器	高杯	−	(13.2)	−	良好	明赤褐色	微砂粒	裾部刺突文
10	土壙7	弥生土器	壷	(12.2)	−	−	不良	にぶい橙色	微砂粒	
11	土壙7	弥生土器	甕	(13.1)	−	−	不良	にぶい黄橙色	精良	
12	土壙7	弥生土器	甕	(14.1)	−	−	良好	にぶい黄橙色	砂粒	体部焼成後穿孔
13	土壙7	弥生土器	甕	(15.0)	−	−	良好	橙色	砂粒	
14	土壙7	弥生土器	器台	(13.8)	−	−	良好	にぶい橙色	精良	
15	土壙7	弥生土器	器台	(18.0)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
16	土壙11	弥生土器	甕	12.9	−	−	良好	橙色	微砂粒	
17	土壙11	弥生土器	甕	−	6.5	−	良好	明赤褐色	微砂粒	底部穿孔
18	土壙11	弥生土器	甕	−	5.5	−	良好	にぶい赤褐色	微砂粒	
19	土壙16	弥生土器	甕	−	6.8	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
20	土壙16	弥生土器	分銅形土製品	−	−	−	良好	にぶい赤褐色	微砂粒	破片、刺突文
21	溝1	弥生土器	長頸壷	18.2	−	−	良好	浅黄色	微砂粒	
22	溝1	弥生土器	長頸壷	(15.3)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
23	溝1	弥生土器	長頸壷	16.2	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
24	溝1	弥生土器	長頸壷	(22.3)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
25	溝1	弥生土器	長頸壷	(18.8)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
26	溝1	弥生土器	長頸壷	17.5	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
27	溝1	弥生土器	長頸壷	(18.0)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
28	溝1	弥生土器	長頸壷	17.9	−	−	良好	橙色	微砂粒	肩部焼成後穿孔
29	溝1	弥生土器	長頸壷	23.5	−	−	良好	明赤褐色	砂粒	
30	溝1	弥生土器	長頸壷	16.3	−	−	良好	橙色	微砂粒	
31	溝1	弥生土器	壷	(16.6)	−	−	不良	橙色	微砂粒	
32	溝1	弥生土器	壷	15.0	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
33	溝1	弥生土器	壷	(14.8)	−	−	不良	にぶい黄橙色	微砂粒	
34	溝1	弥生土器	壷	(20.0)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
35	溝1	弥生土器	壷	(16.8)	−	−	不良	橙色	粗砂粒	
36	溝1	弥生土器	壷	(11.6)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
37	溝1	弥生土器	壷	(18.8)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
38	溝1	弥生土器	壷	(15.6)	−	−	不良	灰白色	粗砂粒	
39	溝1	弥生土器	壷	(15.8)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
40	溝1	弥生土器	壷	14.9	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
41	溝1	弥生土器	壷	(15.8)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
42	溝1	弥生土器	壷	(16.7)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
43	溝1	弥生土器	壷	(14.3)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
44	溝1	弥生土器	壷	(14.9)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
45	溝1	弥生土器	壷	18.3	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
46	溝1	弥生土器	壷	17.2	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
47	溝1	弥生土器	壷	−	7.0	−	不良	浅黄橙色	粗砂粒	
48	溝1	弥生土器	壷	−	5.6	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
49	溝1	弥生土器	壷	−	3.6	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
50	溝1	弥生土器	壷	−	9.2	−	良好	赤色	微砂粒	
51	溝1	弥生土器	壷	−	7.7	−	良好	浅黄色	微砂粒	
52	溝1	弥生土器	壷	−	9.0	−	良好	にぶい橙色	粗砂粒	
53	溝1	弥生土器	壷	−	10.7	−	良好	赤色	微砂粒	
54	溝1	弥生土器	壷	−	8.5	−	良好	橙色	微砂粒	
55	溝1	弥生土器	壷	−	9.4	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
56	溝1	弥生土器	甕	(18.0)	−	−	良好	暗灰黄色	粗砂	
57	溝1	弥生土器	甕	(14.2)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	

掲載番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・調整
				口径	底（脚）径	器高				
58	溝1	弥生土器	甕	(12.2)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
59	溝1	弥生土器	甕	(18.1)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
60	溝1	弥生土器	甕	(14.9)	−	−	良好	黒褐色	精良	
61	溝1	弥生土器	甕	(14.6)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
62	溝1	弥生土器	甕	(17.2)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
63	溝1	弥生土器	甕	(15.0)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
64	溝1	弥生土器	甕	(14.1)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
65	溝1	弥生土器	甕	(13.9)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
66	溝1	弥生土器	甕	(13.8)	−	−	良好	橙色	精良	
67	溝1	弥生土器	甕	13.8	−	−	良好	浅黄色	微砂粒	
68	溝1	弥生土器	甕	(16.8)	−	−	良好	明褐色	微砂粒	
69	溝1	弥生土器	甕	(15.4)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
70	溝1	弥生土器	甕	(15.1)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
71	溝1	弥生土器	甕	(9.1)	−	−	良好	暗褐色	微砂粒	
72	溝1	弥生土器	甕	(15.9)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
73	溝1	弥生土器	甕	(17.5)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
74	溝1	弥生土器	甕	(20.8)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
75	溝1	弥生土器	甕	(14.9)	−	−	不良	灰白色	粗砂	
76	溝1	弥生土器	甕	(11.4)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
77	溝1	弥生土器	甕	−	5.6	−	良好	赤褐色	微砂粒	
78	溝1	弥生土器	甕	−	5.0	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
79	溝1	弥生土器	甕	−	(5.4)	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
80	溝1	弥生土器	甕	−	6.0	−	良好	明赤褐色	粗砂	
81	溝1	弥生土器	甕	−	2.8	−	良好	灰黄褐色	微砂粒	
82	溝1	弥生土器	甕	−	5.8	−	良好	橙色	微砂粒	
83	溝1	弥生土器	甕	−	6.2	−	良好	橙色	微砂粒	
84	溝1	弥生土器	甕	−	4.5	−	良好	明黄褐色	微砂粒	
85	溝1	弥生土器	甕	−	7.0	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
86	溝1	弥生土器	甕	−	5.1	−	良好	赤褐色	微砂粒	
87	溝1	弥生土器	甕	−	4.8	−	良好	にぶい黄色	精良	
88	溝1	弥生土器	甕	−	6.4	−	良好	にぶい褐色	微砂粒	底部穿孔
89	溝1	弥生土器	甕	−	3.9	−	良好	明赤褐色	微砂粒	底部穿孔
90	溝1	弥生土器	甕	−	4.2	−	良好	にぶい赤褐色	微砂粒	
91	溝1	弥生土器	高杯	(20.8)	−	−	良好	赤色	精良	外面弧状ヘラミガキ
92	溝1	弥生土器	高杯	(20.8)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
93	溝1	弥生土器	高杯	(24.6)	−	−	良好	橙色	精良	
94	溝1	弥生土器	高杯	(21.6)	−	−	良好	明赤褐色	精良	内外面赤色顔料塗布
95	溝1	弥生土器	高杯	(18.0)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
96	溝1	弥生土器	高杯	20.5	13.1	14.9	良好	にぶい赤褐色	微砂粒	円形透２段
97	溝1	弥生土器	高杯	22.4	−	−	良好	橙色	精良	
98	溝1	弥生土器	高杯	(25.0)	(12.5)	16.3	良好	赤色	微砂粒	円形透
99	溝1	弥生土器	高杯	−	9.6	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
100	溝1	弥生土器	高杯	−	12.3	−	良好	明赤褐色	微砂粒	裾部ヘラ描沈線
101	溝1	弥生土器	高杯	−	13.7	−	良好	にぶい橙色	微砂粒	円形透
102	溝1	弥生土器	高杯	−	(16.7)	−	良好	赤褐色	微砂粒	円形透２段
103	溝1	弥生土器	高杯	−	(17.8)	−	良好	橙色	微砂粒	円形透
104	溝1	弥生土器	高杯	19.0	−	−	良好	浅黄橙色	微砂粒	
105	溝1	弥生土器	高杯	17.8	−	−	不良	橙色	精良	
106	溝1	弥生土器	高杯	(19.9)	−	−	良好	明赤褐色	水簸	
107	溝1	弥生土器	高杯	(20.4)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
108	溝1	弥生土器	高杯	(16.7)	−	−	良好	明赤褐色	水簸	
109	溝1	弥生土器	高杯	15.8	(9.0)	8.3	良好	にぶい黄橙色	水簸	円形透
110	溝1	弥生土器	高杯	14.4	9.7	8.0	良好	橙色	水簸	円形透
111	溝1	弥生土器	高杯	−	(10.8)	−	良好	にぶい黄橙色	水簸	円形透
112	溝1	弥生土器	高杯	−	10.9	−	良好	にぶい黄橙色	精良	円形透
113	溝1	弥生土器	高杯	−	10.6	−	良好	にぶい黄橙色	水簸	円形透
114	溝1	弥生土器	高杯	−	10.3	−	良好	にぶい黄橙色	水簸	円形透
115	溝1	弥生土器	台付壷	7.5	−	−	良好	浅黄色	精良	
116	溝1	弥生土器	台付壷	−	11.5	−	良好	黄橙色	微砂粒	円形透
117	溝1	弥生土器	台付壷	4.5	−	−	良好	にぶい黄橙色	精良	

掲載番号	出土位置	種　別	器　種	法量（cm）			焼成	色　調	胎土	特　徴・調　整
				口径	底（脚）径	器高				
118	溝1	弥生土器	台付壷	−	(11.0)	−	良好	にぶい黄橙色	精良	円形透
119	溝1	弥生土器	台付壷	−	−	−	不良	灰白色	微砂粒	円形透
120	溝1	弥生土器	鉢	(18.0)	(6.2)	10.0	良好	赤褐色	微砂粒	
121	溝1	弥生土器	鉢	(18.5)	(7.8)	10.2	良好	赤色	微砂粒	
122	溝1	弥生土器	鉢	20.2	8.3	11.7	良好	赤色	微砂粒	
123	溝1	弥生土器	鉢	(43.9)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
124	溝1	弥生土器	鉢	(40.0)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
125	溝1	弥生土器	台付鉢	(17.8)	−	−	良好	にぶい黄橙色	精良	
126	溝1	弥生土器	台付鉢	(16.6)	−	−	良好	にぶい褐色	微砂粒	
127	溝1	弥生土器	台付鉢	(14.0)	10.1	11.5	良好	橙色	微砂粒	
128	溝1	弥生土器	台付鉢	(14.3)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
129	溝1	弥生土器	台付鉢	−	12.3	−	良好	赤色	微砂粒	
130	溝1	弥生土器	台付鉢	−	12.0	−	良好	橙色	微砂粒	
131	溝1	弥生土器	台付鉢	−	(8.1)	−	良好	橙色	微砂粒	
132	溝1	弥生土器	器台	29.6	28.8	25.0	良好	明赤褐色	微砂粒	円形・長方形透
133	溝1	弥生土器	器台	29.0	29.0	25.9	良好	橙色	微砂粒	円形・長方形透
134	溝1	弥生土器	器台	(29.6)	30.1	28.0	不良	赤色	微砂粒	長方形透
135	溝1	弥生土器	器台	(24.9)	(24.0)	23.6	良好	浅黄橙色	微砂粒	円形透
136	溝1	弥生土器	器台	−	(30.7)	−	良好	明赤褐色	微砂粒	長方形透
137	溝1	弥生土器	器台	−	(30.0)	−	良好	明赤褐色	微砂粒	長方形透
138	溝1	弥生土器	器台	−	(16.9)	−	良好	にぶい褐色	微砂粒	
139	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.1	−	良好	淡黄色	粗砂粒	
140	溝1	弥生土器	製塩土器	−	5.3	−	良好	灰白色	粗砂粒	
141	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.2	−	良好	灰黄色	粗砂粒	
142	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.2	−	良好	にぶい黄色	粗砂粒	
143	溝1	弥生土器	製塩土器	−	5.5	−	良好	にぶい黄色	粗砂粒	
144	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.0	−	良好	暗オリーブ褐色	粗砂粒	
145	溝1	弥生土器	製塩土器	−	4.9	−	良好	明黄褐色	粗砂粒	
146	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.0	−	良好	明黄褐色	粗砂粒	
147	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.6	−	良好	にぶい黄橙色	粗砂粒	
148	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.7	−	良好	灰白色	粗砂粒	
149	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.6	−	良好	黒褐色	粗砂粒	
150	溝1	弥生土器	製塩土器	−	5.3	−	良好	浅黄色	粗砂粒	
151	溝1	弥生土器	製塩土器	−	6.4	−	良好	淡黄色	粗砂粒	
152	溝1	弥生土器	製塩土器	−	5.7	−	良好	浅黄色	粗砂粒	
153	溝1	弥生土器	製塩土器	−	5.8	−	良好	にぶい黄橙色	粗砂粒	
154	溝1	弥生土器	製塩土器	−	5.0	−	良好	にぶい黄橙色	粗砂粒	
155	溝1	弥生土器	製塩土器	−	4.1	−	良好	明褐色	粗砂粒	
156	溝1	弥生土器	製塩土器	−	3.8	−	良好	にぶい黄橙色	粗砂粒	
157	溝1	弥生土器	カップ形土器	7.8	3.5	5.5	不良	にぶい黄橙色	微砂粒	把手付
158	溝1	弥生土器	鉢	(6.1)	−	−	良好	黄褐色	精良	ミニチュア
159	溝1	弥生土器	分銅形土製品	−	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	貫孔あり
160	溝1	弥生土器	投弾	−	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	径3.9ｃｍ
161	溝3	弥生土器	壷	(14.5)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
162	溝3	弥生土器	壷	(15.5)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
163	溝3	弥生土器	甕	(25.1)	−	−	良好	浅黄色	精良	
164	溝3	弥生土器	甕	(9.8)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
165	溝3	弥生土器	高杯	(13.6)	−	−	良好	浅黄色	微砂粒	裾部刺突文・沈線
166	溝4	弥生土器	壷	(14.2)	−	−	良好	灰黄色	精良	
167	溝4	弥生土器	甕	(15.6)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
168	溝4	弥生土器	甕	11.2	−	−	良好	にぶい赤褐色	微砂粒	
169	溝4	弥生土器	甕	(15.6)	−	−	良好	明赤褐色	精良	
170	溝4	弥生土器	甕	(14.8)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
171	溝4	弥生土器	甕	(13.5)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
172	溝4	弥生土器	甕	(12.6)	−	−	良好	明黄褐色	精良	口縁部刻目、頸部刺突文
173	溝4	弥生土器	甕	11.1	6.4	19.4	良好	赤褐色	微砂粒	肩部刺突文
174	溝4	弥生土器	甕	−	10.8	−	良好	浅黄色	微砂粒	
175	溝4	弥生土器	甕	−	6.7	−	良好	赤褐色	微砂粒	
176	溝4	弥生土器	甕	−	6.1	−	良好	にぶい黄褐色	微砂粒	
177	溝4	弥生土器	甕	−	6.9	−	良好	明赤褐色	微砂粒	

掲載番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・調整
				口径	底（脚）径	器高				
178	溝4	弥生土器	高杯	21.6	13.9	14.4	不良	赤色	微砂粒	裾部刺突文
179	溝4	弥生土器	高杯	(22.9)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	口縁端部凹線文
180	溝4	弥生土器	高杯	(21.4)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
181	溝4	弥生土器	高杯	−	(14.7)	−	良好	赤色	微砂粒	裾部円形透
182	溝6	弥生土器	長頸壺	(13.3)	−	−	良好	橙色	精良	
183	溝6	弥生土器	壺	−	(6.4)	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
184	溝6	弥生土器	甕	−	(5.2)	−	良好	橙色	微砂粒	
185	溝6	弥生土器	製塩土器	−	5.2	−	良好	にぶい黄橙色	粗砂粒	
186	溝6	土師質土器	椀	−	7.4	−	良好	灰黄褐色	砂粒	内面黒色
187	溝6	須恵器	甕	(23.2)	−	−	良好	灰色	精良	外面自然釉
188	溝7	弥生土器	甕	(13.9)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
189	溝7	弥生土器	甕	(13.8)	−	−	良好	浅黄橙色	微砂粒	
190	溝7	弥生土器	甕	−	(7.5)	−	良好	橙色	微砂粒	
191	溝7	弥生土器	甕	−	5.1	−	良好	灰白色	粗砂粒	
192	溝7	弥生土器	甕	−	5.8	−	良好	赤灰色	微砂粒	
193	溝7	弥生土器	器台	(26.6)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
194	溝7	弥生土器	製塩土器	−	6.0	−	良好	黒褐色	粗砂粒	
195	溝7	弥生土器	製塩土器	−	4.0	−	良好	灰黄色	粗砂粒	
196	溝7	弥生土器	製塩土器	−	5.6	−	良好	橙色	粗砂粒	
197	溝7	弥生土器	製塩土器	−	7.7	−	良好	灰黄色	粗砂粒	
198	溝7	土師器	杯	(19.1)	12.1	7.5	良好	明褐色	水簸	貼付高台
199	溝7	土師器	杯	(14.7)	(11.6)	3.1	良好	明黄褐色	水簸	外面赤色顔料痕
200	溝7	土師器	杯	(15.3)	(11.5)	2.9	良好	明黄褐色	水簸	内外面赤色顔料痕
201	溝7	土師器	杯	(16.8)	(13.8)	3.2	良好	明褐色	水簸	内面赤色顔料痕
202	溝7	土師質土器	椀	(15.0)	−	−	良好	にぶい黄橙色	精良	内面黒色
203	溝7	土師質土器	椀	(15.7)	6.9	6.2	良好	灰白色	精良	内面黒色
204	溝8	弥生土器	長頸壺	18.8	−	−	良好	橙色	微砂粒	
205	溝8	弥生土器	長頸壺	(20.2)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
206	溝8	弥生土器	壺	(17.2)	−	−	良好	赤褐色	微砂粒	
207	溝8	弥生土器	甕	(19.6)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
208	溝8	弥生土器	甕	(18.6)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
209	溝8	弥生土器	甕	(14.2)	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
210	溝8	弥生土器	甕	(15.0)	−	−	良好	橙色	精良	
211	溝8	弥生土器	甕	−	5.1	−	良好	明赤褐色	微砂粒	
212	溝8	弥生土器	高杯	(14.5)	−	−	良好	明黄褐色	微砂粒	裾部刺突文、沈線文
213	溝8	弥生土器	高杯	(13.0)	−	−	不良	明赤褐色	微砂粒	円形透
214	溝8	弥生土器	製塩土器	−	5.9	−	良好	明褐色	粗砂粒	
215	溝8	弥生土器	製塩土器	−	5.2	−	良好	にぶい黄橙色	粗砂粒	
216	溝8	弥生土器	壺	−	(1.2)	−	良好	明赤褐色	微砂粒	ミニチュア
217	溝8	弥生土器	壺	−	2.6	−	良好	明赤褐色	微砂粒	ミニチュア
218	溝8	土師器	杯	(11.8)	(8.8)	−	良好	にぶい黄橙色	水簸	内面赤色顔料痕
219	溝8	土師器	杯	(13.1)	(9.6)	2.0	良好	明赤褐色	水簸	外面赤色顔料痕
220	溝8	土師器	杯	(14.4)	(10.9)	2.6	良好	にぶい黄橙色	水簸	内外面赤色顔料痕
221	溝8	土師器	皿	(15.3)	(13.2)	1.6	良好	浅黄色	水簸	内外面赤色顔料痕
222	溝8	土師器	皿	(15.8)	(13.5)	1.6	良好	浅黄色	水簸	内外面赤色顔料痕
223	溝8	須恵器	杯	(15.0)	11.1	4.7	不良	黒色	微砂粒	貼付高台
224	溝8	須恵器	高杯	−	10.7	−	不良	黒色	微砂粒	
225	溝8	須恵器	壺	−	−	−	良好	灰黄色	精良	
226	溝8	土師質土器	椀	−	(7.0)	−	良好	橙色	精良	内面黒色
227	溝8	弥生土器	勾玉形土製品	−	−	−	良好	明赤褐色	微砂粒	全長3.5cm
228	溝9	弥生土器	甕	(16.7)	−	−	良好	橙色	微砂粒	
229	溝9	弥生土器	高杯	(18.3)	−	−	良好	橙色	精良	
230	溝9	弥生土器	台付鉢	−	(6.8)	−	良好	橙色	微砂粒	
231	溝9	土師器	甕	−	−	−	良好	黒褐色	微砂粒	
232	溝9	須恵器	瓶	−	−	−	良好	灰色	微砂粒	
233	溝9	須恵器	瓶	−	(8.0)	−	良好	黄灰色	微砂粒	貼付高台
234	溝9	土師質土器	椀	−	(11.2)	−	良好	にぶい赤褐色	精良	貼付高台
235	溝9	土師質土器	椀	−	(9.1)	−	良好	にぶい赤褐色	精良	貼付高台
236	西落ち込み	弥生土器	甕	(17.8)	−	−	良好	にぶい褐色	微砂粒	
237	西落ち込み	弥生土器	甕	(21.4)	−	−	良好	にぶい黄橙色	精良	

掲載番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・調整
				口径	底（脚）径	器高				
238	西落ち込み	弥生土器	甕	(14.5)	−	−	良好	にぶい黄橙色	微砂粒	
239	西落ち込み	弥生土器	甕	−	(7.0)	−	良好	にぶい橙色	微砂粒	
240	西落ち込み	土師質土器	椀	(11.5)	−	−	良好	灰白色	砂粒	
241	西落ち込み	土師質土器	椀	−	(6.3)	−	良好	浅黄橙色	水簸	貼付高台
242	西落ち込み	土師質土器	椀	−	(5.7)	−	良好	灰白色	水簸	貼付高台
243	西落ち込み	土師質土器	小皿	(7.8)	(5.4)	1.1	良好	灰褐色	水簸	

出土石器組成表

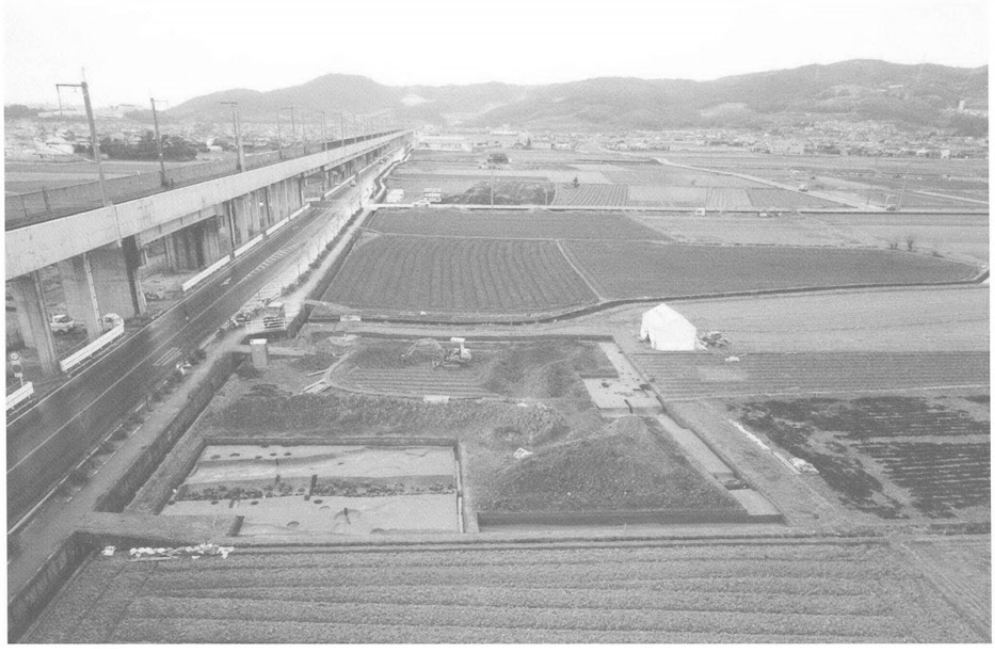
石材	サヌカイト						その他				計	重量(g)
器種	石鏃	石包丁	スクレイパー	不明石器	加工痕剥片	剥片	粘板岩製石包丁	花崗岩製石錘	砥石	ホルンフェルス製石核		
確認調査	1				1						2	3.6
井戸					1	1					2	12.1
土壙7					1	2					3	22.6
土壙9						1					1	7.5
土壙24						1					1	0.3
溝1	1	3	1		1	9	1				16	264.0
溝2						1					1	20.7
溝4						2					2	2.9
溝6					1	1					2	41.2
溝7						1		1			2	0.9
溝8					1	10				1	12	110.1
溝9					1	1					2	20.0
西方落ち込み					1						1	6.5
包含層				1		2			1		4	29.8
その他	1					1					2	2.1
計	3	3	1	1	8	33	1	1	1	1	53	544.3

重量はサヌカイトのみ（石錘・砥石・石核は含まない）

出土石器一覧表

番号	出土位置	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
−	確認調査	石鏃（凹基）	サヌカイト	2.62	2.12	0.41	2.0
S 1	溝 1	石鏃（有茎）	サヌカイト	(2.98)	1.29	0.37	1.6
−	その他	石鏃（有茎）	サヌカイト	(3.01)	1.30	0.42	1.6
S 2	溝 1	石包丁	サヌカイト	6.30	(8.89)	0.95	62.4
S 3	溝 1	石包丁	サヌカイト	4.57	(5.68)	0.78	27.1
S 4	溝 1	石包丁	サヌカイト	4.40	(4.34)	0.96	14.4
S 5	溝 1	石包丁	粘板岩	4.65	10.48	0.89	55.0
−	溝 1	スクレイパー	サヌカイト	3.76	5.46	0.54	12.9
−	包含層	不明石器	サヌカイト	3.61	(4.87)	0.71	151
S 6	溝 7	石錘	花崗岩	7.80	6.70	4.45	336.5
−	包含層	砥石	不明	(6.60)	6.00	3.00	130.7
−	溝 8	石核	ホルンフェルス	11.40	14.80	2.40	581.9

图　版

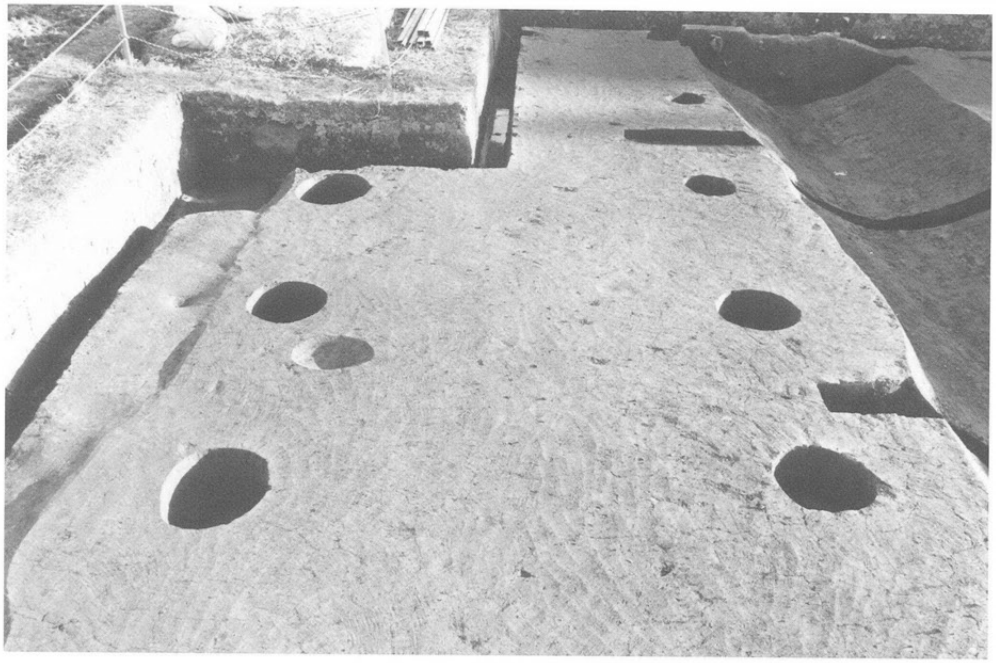


1. 調査区遠景
（東方からの航空写真）

2. 調査区全景
（航空写真）

3. 住居跡（南東から）

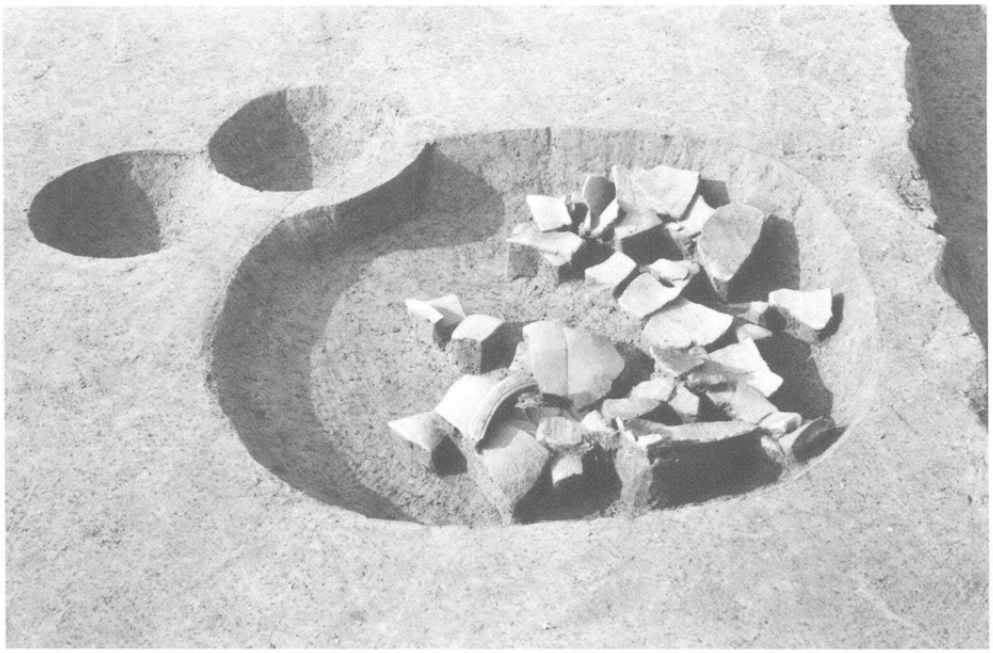
図版２



1. 掘立柱建物（北から）

2. 井戸（南から）

3. 北辺部土壙群（北から）



1. 土壙６（東から）

2. 溝１全景（北から）

3. 溝１土器出土状況
（北西から）

図版 4

1. 溝 1 完掘状況（北から）

2. 北辺部溝 1（南から）

3. 溝5・溝 9（西から）

1. 北辺部北壁土層断面
（東から）

2. 作業風景

3. 現地説明会風景

図版６　　出土遺物（１）

2

21

3

41

48

28

49

96

98

109

110

121

127

132

135

134

170

図版８　出土遺物（３）

198

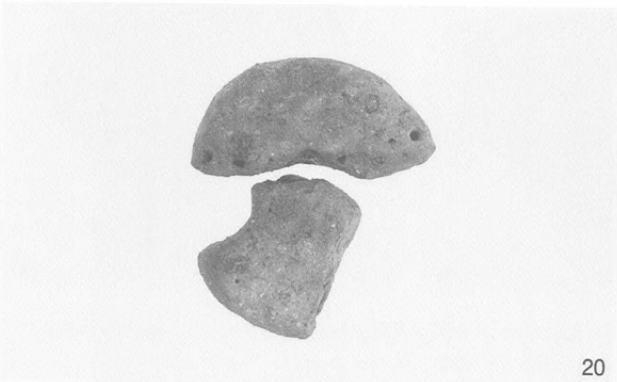
201

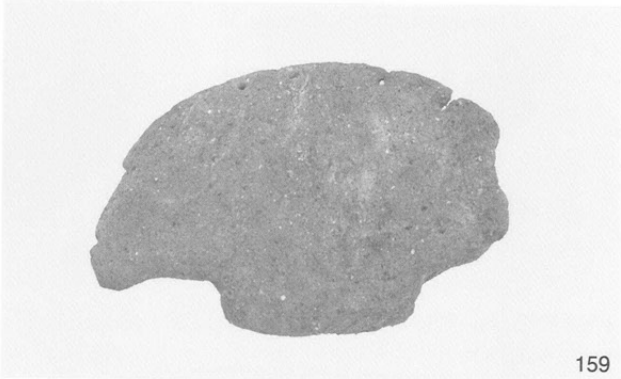
224

225

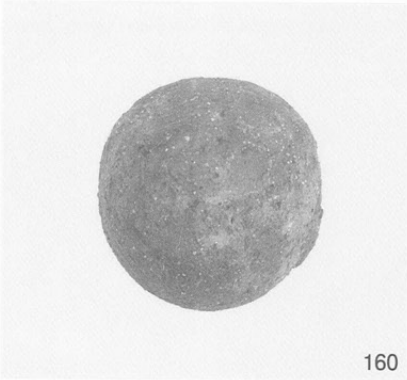
204

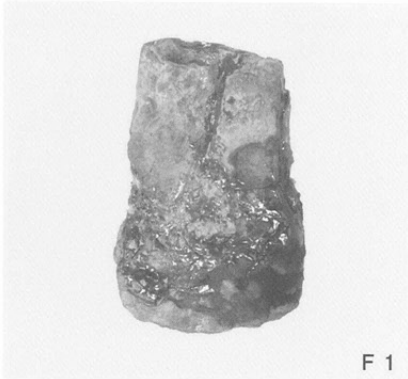
157

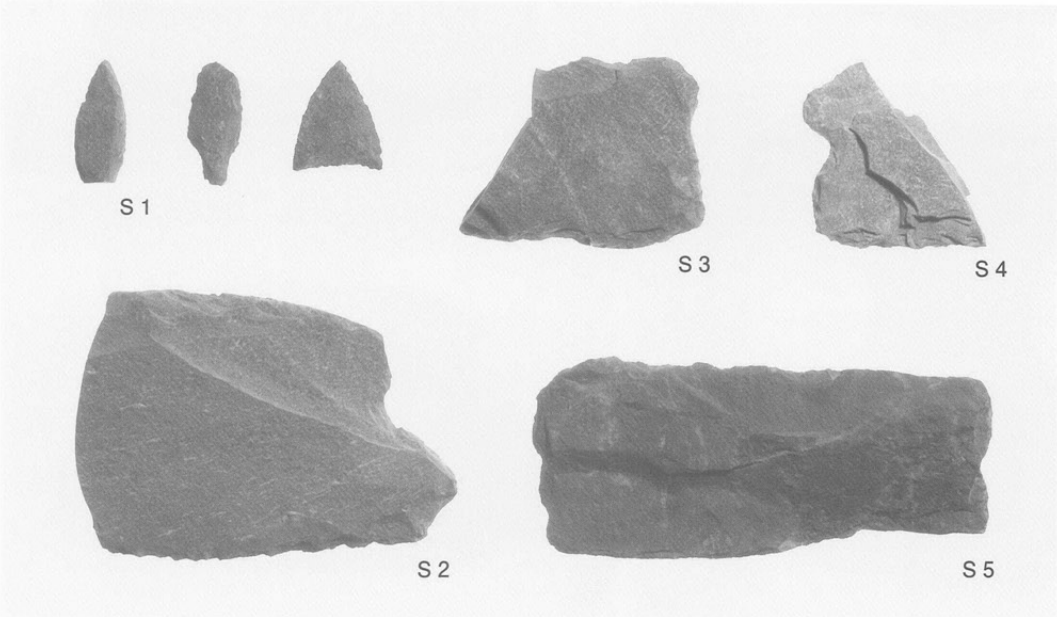

20


159

228


160


F 1



報告書抄録

ふりがな	いわくらいせき
書名	岩倉遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第13集
編著者名	福本 明・藤原好二
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター
所在地	〒712-8046　岡山県倉敷市福田町古新田940番地　TEL 086-454-0600
発行年月日	平成21年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩倉遺跡（いわくらいせき）	岡山県倉敷市日畑（おかやまけんくらしきし ひぼた）	33202	01-220	34° 39' 07"	133° 49' 54"	19901113～ 19910215	360㎡	ガソリンスタンド建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩倉遺跡	集落跡	弥生時代 古代・中世	溝・住居跡・井戸 溝	弥生土器・石器 須恵器・土師質土器	

印刷仕様

紙　　質	表紙：サンマット160kg（PP張り）
	本文：書籍用紙65kg
	図版：マットアート110kg
編　　集	Mac OS 10.5.6　Adobe InDesign CS3
	Adobe Photoshop CS3
使用フォント	モリサワ OpenType フォント
	（リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・太ゴ B101・見出ゴ MB31）
製　　本	無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第13集

岩倉遺跡

平成21年3月31日印刷発行

発 行　倉敷市教育委員会

編 集　倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046　倉敷市福田町古新田940番地

TEL 086-454-0600

The Excavation Report
Of
Iwakura Site In Sho

Volume 13

Kurashiki
Archaeological Center

March 2009